アルシャード・ゼロマ

風鳴刹影

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アルシャード・ゼロマ

【Ｎコード】
Ｎ３８９９Ｎ

【作者名】
風鳴刹影

【あらすじ】
神様はダイスを振らない。振るのはいつもプレイヤーだ。ダイスの出目でアルシャード・ガイアの世界に転生した主人公、如月イツキ。高レベルのクエスター（探求者）として転生した彼は、転生して一年後、銀色に輝く門に出会う。そして、そこから聞こえてくる少女の声に応え、異世界――ハルケギニアの地に立った。

ゼロマ・1-1（前書き）

このＳＳは、ゼロの使い魔とアルシャード・ガイア（オリ主）のクロスです。

ゼロマ・1-1

如月イツキは死んだ。
なぜ死んだのかは分からない。
ただ、オレが目覚めた場所で、ヤツにそう告げられたんだ。
「はじめまして如月イツキくん。
私の名前は、アラン・スミス」
アメリカ映画で、名前を出したくない監督が名乗る“誰でもない”と言う意味を持たせた名前だったな。……それにしても、どこかで見たことがある男だな。何処でだ??
「……ここは？　それに、アンタは？」
「う～ん、質問はまず優先順位を決めた方が良いね～？」
どこか、飄々としている。
オレは訝しげに顔を歪めると、
「……ここは何処だ？」
「ここは……正確には何処でもない。
強いて言うならば死後の世界。魂が輪廻に帰るまでの間、漂う場所……かな？」
「……その言い方だと、俺は死んだのか？」
「そうなるね」
やはり飄々とアランは言った。
「どうして、かね？」……そうだ」
「う～ん、僕は君がどうしてここに来たのかは知らないんだ。ただ、ここに来た者達は全員もう肉体を持っていないと言う事だけさ」
「……それで、アンタも死んだのか？」
「アランと呼んでくれ。
そうだね～、僕は死んでいるって言うよりここにいなければなら者なんだ。
そして、ここから出て行く者達がちゃんと次の場所に行ける様に

するのが、僕の仕事さ」
「……そうか」
「そう！　それじゃ、君が次に行くべき場所を決定しよう」
そう言って、アランは懐からジャラジャラと数字の書かれた正六面体――ダイスをとりだした。
「それで決めるのか？」
「そうそう。運任せみたいな物だけど……これもまた一興」
そう言って、アランはかなりの量のダイスをイツキに渡してくる。
「どんな結果が出るかは、振って見てのお楽しみさ」
そう言う物なのかと、オレは全部のダイスを投げ落とした。
ジャラジャラジャラ……。
沢山のダイスが、どこかに当たり盛大に転がる。そして……、

「……ここは？」
シトシトと降り注ぐ雨、頬にはアスファルトの冷たい感触がした。
辺りを見渡すと、コンクリートブロックで作られた外壁に近代的な家屋。さらにその向こうには天を貫く摩天楼――コンクリートジャングルが広がっていた。
廃墟、ではなくちゃんと人の営みが感じられる街だ。
「やぁ～と起きたか、このねぼすけが！」
「おわ！？」
な、なんだ！？
突然、オレの目の前にアイボリーな長い髪をもった小人が現れた。しかもその小人は空中に浮いている。
「つ～！？」
転んだ拍子に、背中を打っちまったか？
「お～、悪いのう。
脅かせる気はなかったのじゃが……」
小人――いや少女は、かなり古風な口調ですまなかったと言いっ

た。そして、オレの膝の上にちょこんと立つと、
「わしはアスナ、見てのとおり妖精じゃ」
そう言って、少女――アスナは背中に昆虫の様な薄く、そして魔法的な幾何学模様が浮き出た羽をこれ見よがしに出現させた。
……突然の事が多すぎて、正直に言うと頭が痛い。それが、オレの正直な考えだ。とりあえず、今自分がどの様な状況なのか、目の前で妖精を名乗る少女に説明してもらおう。
「まぁ……妖精っぽいな。
それで、いったいオレはどうなったんだ？」
「む～、妖精っぽいとは何事じゃ！
……まぁ、今は仕方ない。それよりも、お主がどうなったのかを説明せよと、あやつに言われておるからな～。
とりあえず、落ち着ける場所にいかんか？　このままでは、お主が風邪を引いてしまう」
そう言えばそうだ。雨にぬれて、このままではいずれ風邪ひくだろう……。どこか雨をしのげそうな場所はないか？
「……あそこが、丁度いいか？」
目に入ったのは、公園にあった天井付きのベンチ。
オレはとりあえずそのベンチに座り、アスナは目の前にちょこんと座った。
「さて、それじゃ説明するかの……」
それから、アスナの説明が始まった。
曰く、オレはこの世界に突然出現した。
曰く、自分（アスナ）はオレが戸惑わないようにと着けられた特典らしい。
曰く、この世界はブルースフィアと呼ばれる世界である。
曰く、オレはこの世界でクエスターと呼ばれる存在である。
曰く、オレはとても強いクエスターである。
この説明を聞いて、自分の知識の中からあるゲームの名前が浮かんだ。そのゲームの名前は、アルシャード・ガイア。剣と魔法の現代風ファンタジーＴＲＰＧ……だったとおぼろげながら覚えている。

そして、アスナはある魔剣に宿った妖精――剣精らしい。
そこまで聞くとオレは急に頭痛に襲われ……頭の中に自分が手に入れた力の情報をを叩き込まれた気がした。
「お、おい……大丈夫かお主？」
「あ、ああ、大丈夫だアスナ。
それより、オレはこんな力を手にしちまったのか？」
今しがた解った自身の力、
「……力に溺れる出ないぞ？
その力は、何かを成すためのモノじゃ。お主がどう使うか分からんが、溺れてはならんぞ？」
やけに心配するなアスナ、初対面なのに……。オレはそう思いながらアスナの頭を優しく撫でた。
「……とりあえず、寝るところを確保せにゃいかんな。
ダンボールハウスで寝泊りはゴメンだ」
オレはとりあえずおどけた様に言いながら、アスナを自分の片に乗せ、腰の収納バッグから大きめの傘を取り出して歩き出した。
当ては無いが、何とかなる。彼はそんな気がしていたのだ。

＊

それから月日が流れ、
「マスター、敵残存勢力、残り僅かです」
そう言うと、鋼の乙女は両手に持った大型の軽機関砲――ブレイクガンで敵をなぎ払っていく。
「分かった。
それじゃ、一気に倒すぞアスナ！！」
「おう！」
オレの呼びかけにアスナが呼応する。対峙するは、奈落の化け物。

「〈パワーコード〉入力！　〈ブーストアタック〉、〈チャージショット〉！」
ガコンッ！
「「砕け散れい！！」」
ガガガッコンッ！！！
幾つモノ魔法弾が打ち出され、真紅に輝いたアスナの刃が奈落の化け物をなぎ払った。
「……敵性対象、完全に沈黙。ミッションコンプリートですマスター」
ミカ――ミカエルの機械的な声が、戦闘の終焉を告げた。

あの雨の日、オレ達はとうとう寝る場所も食べる物も確保できずに途方に暮れていた。そこに偶然通りかかった来嶋牡丹という女性に助けられ、彼女の経営する宿の部屋を一つ貸してもらえた。
そして、彼女からクエスターの仕事を斡旋してもらい……今回の奈落討伐も彼女がある企業から仲介してくれた仕事だ。
そして、クエスターとして活動しているうちに、オレにも背中を任せられる仲間が出来た。破壊天使の通称で呼ばれているマシンヘッド、ミカエルだ。
彼女との出会いは、ここではあまり関係ない。ただ、今はオレのパートナーとして一緒に暮らしている。ソレだけが事実だ。
根っからの戦争屋であった彼女だが、掃除に洗濯といった家事スキルが意外に高くオレの方が足手まといになっている。だが、
「……もう少し料理がうまけりゃなぁ～」
「どうかされましたか？」
なんでもないとミカに言う。しかし、内心ではあの時食べた紫と青のマーブル模様が浮かんだシーチューを思い出していた。……破壊的な料理の腕前って実在したんだな。
「そうですマスター、今日の晩御飯は私が作りましょうか？」

止めてくれ！！　オレはまだ七色なナニかを吐き出したくないんだ！！

オレがダメだと言うと、ミカはしょんぼりとしてしまう。最近はアスナと一緒に料理の特訓をしているみたいだが……調理器具という名の廃棄物が増える一方だったりもする。

「とにかく、今日の晩御飯は俺が作る。解ったな？」

「……ヒマだ」

「良いではないか、ヒマという価値は忙しい時しかわからんらしい。ここ最近慌しかったのだ。このヒマを満喫せねば罰が当たるぞ？」

雲ひとつない蒼い空を見上げて、アスナと一緒に日向ぼっこ。

たしかにここ最近依頼が多かった。フリーランスの、それも高レベルのクエスターであるオレ達の名は、この一年でそこそこ売れていた。

最初は比較的小規模な仕事をやっていたが、企業がらみの大きな依頼や世界規模の災害を一つ二つと解決していくうちに……、

『私の……』

「ん？」

「どうしたイツキ？」

「いや、今誰か呼ばなかったか？」

「ん～？」

『……声に……』

「気のせいではないのか？」

『私……に……なさい』

「いや、はっきりと聞こえるぞ？」

「ん～、わしには何も……」

『私の声に応えなさい！』

一際その声がハッキリと聞こえた瞬間、目の前に銀色の鏡の様なモノが出現した。

「な、なんじゃこれは〜??」
アスナが素っとん狂な声を上げている。オレは、その銀色の鏡の様な物を見詰めていた。
「……アスナ、どうやらヒマな時間は終わったみたいだ」
「は?」
そう、オレの記憶が正しければ……。そして、この鏡の向こうから感じられる気配から、トテモヤバイ事態が待ち受けていると解る。
〈運命の予感〉ってヤツかな??
オレは携帯を取り出すと、
『ちょっと異世界に行って来る』
と、ミカにメールを出して、銀色の鏡の中に飛び込んでいった。
「ちょ、まて! わしは説明を要きゅ……!!」
アスナがなにかをわめいていた気がしたが、まぁいいか。
そして、
「あ、アンタ誰?」
オレの目の前にピンクブロンドの少女が立っていた。

ゼロマ・1-1（後書き）

別の作品を書いていて、煮詰まったのでアイディア出しの気晴らしをしようと、アルシャードのキャラクターを作ったらそのままSSを書き出してしまった。
反省はしていますが、後悔はしていません。

とりあえず、プロローグ終了。
駆け足でしたが、とにかく早くオリ主にはゼロ魔の世界に行ってほしかったので。
一応オリ主最強系です。ただし、ゲームのルールを元にして作っているのでチートではありません。
あ、でもちょっとしたチートアイテムを持たせてあります。必要なので。

誤字や脱字など有りましたらご報告願います。感想もお待ちしています。

ゼロマ・1-2（前書き）

このＳＳはゼロの使い魔とアルシャード・ガイア（オリ主）とのクロスです。

ゼロマ・1-2

「あ、アンタ誰？」
銀色の鏡の様な物を抜けて、オレはどこか草原の様な場所に立っていた。目の前には、黒いマントにタクトの様な杖を持ったピンクブロンドの少女が身体を震わせながら立っていた。
「オレはイツ……」
「ミスタ・コルベール先生、やり直しを要求します！！」
少女に誰何されたので応えようとしたが、ソレよりも先に少女は先生と呼んだ……ちと頭が寂しくなってきている男に何かのやり直しを要求していた。
「ダメですミス・ヴァリエール。この春の使い魔召喚に儀は、神聖で格式のある何よりも優先されなければ成らない儀式です。やり直しは出来ません」
「そんなぁ……」
先生の言葉を聴いて少女は落胆した。周りから『ゼロのルイズが平民を召喚した』などと、どう聞いても侮蔑の意味合いを込めた感が否めない発言が飛び交っている。この場にいた者達の服装が統一されているのを見る限り、おそらく学校のような教育機関……ここもオレの記憶に間違いはない。それにしても、これじゃ程度が知れているな。
オレはため息を一つつくと、
「何よ、貴族である私じゃ不満だって言うの？」
もう話し合いが終わったのか、目の前に先ほどのピンクブロンドの少女が頬を膨らませていた。
「不満？　あぁ……周りの奴らのレベルが低すぎて呆れていたところだ」
オレは、彼女にだけ聞こえるように小さく言った。
少女は一瞬ギョッとしたような顔をしたが、直ぐに平静を取り戻

すと、
「ま、まぁいいわ！　き、貴族にこんな事してもらえるなんて光栄に思いなさいよね！」
そう言って少女はタクトを構えると、
「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司りしペンタゴン。この者に祝福を与え、我の使い魔となせ。
……ちょっと、私と目線を合わせなさいよ」
上目使いに不満を言う少女、確かにオレの方がはるかに背が高いな。オレは膝を曲げて少女と目線を合わせてやる。
そして、少女はオレの頭に両手を添えると唇に……、
「ちょいっとまったぁあぁ！！」
「ヘブラベバ！？」
グシャッとか、ベシャッとかの擬音が聞こえてきそうな勢いで、少女の顔が陥没した。オレじゃないよ？　オレの目の前のアイボリーな髪を持った妖精ちゃん――アスナが蹴り飛ばしたんだからね？？
「い～きなり、ナニをする気じゃオヌシ！？
イツキもイツキじゃ！　何の疑問も持たずに従うでない、このおおたわけが！！」
「ブベバヘラ！？」
そして、オレの顔にもアスナの蹴りがめり込んだ。……うむ、今日は朱か。
「そこのハゲ頭！」
「な！？　ハゲ頭とはなんですか！！」
「そんな事はどうでも良いハゲ頭！　ワシは説明を要求する！！」
アスナの悲鳴じみた声が草原に木霊した。

＊

「……と、言うわけなんですオールド・オスマン」
「なるほどのう……」
そう言って、ハゲ頭ことコルベール先生は目の前にいる爺さん――オールド・オスマンに事のあらましを説明していた。
今は、アスナの一撃で気絶した少女と共に学園長室と言う場所で話し合いをしている。
あの後、説明を要求するアスナにコルベール先生がしぶしぶ説明すると、
「断固拒否する！」
と、アスナは抗議した。まあ確かに、一生を共にする使い魔……と言うか厳しい自然の中で暮らしていた動物なら安定した衣食住が手に入るのでウハウハだろう。だが、ソレがある程度の知識と文明を持った種、例えば人間だったら？　ソレまでの生活を捨てて一生を使い魔という名の奴隷として過ごさせる気かと、アスナが怒るのも解らんでもないな。
そうそう、アスナが妖精だって事にはだれも驚かなかったようだ。どうも、いきなり少女とオレを蹴り飛ばして吹き飛ばした事が印象に強いらしく、アスナが妖精の羽を出して飛んでいるのに誰もソレを突っ込まない。
まあそんな事で、コルベール先生はとりあえず自分の上司に当たる彼に指示を仰ぎに来た訳だ。
「大体の事情は解ったわい。
それで、妖精のお嬢ちゃんは……」
「ワシの名は、アスナじゃ」
「うむ、アスナ嬢とミスタ……」
「イツキだ。如月イツキ」
「ミスタ・キサラギ殿、お主らには悪いと思うが、ミス・ヴァリエールの使い魔に成ってくれんかのう？」
「オレはかま……」

「拒否する」
アスナがオレの声を遮って拒否を示す。オレの意思は関係ないのか？
「そこを何とかできんかのう？
このままでは、使い魔を得られんかったミス・ヴァリエールは二年に進級する事もできん。しかもじゃ、サモン・サーバントでお主らが呼ばれてしまったと言う事は、今後もしサモン・サーバントを唱えたとしてもお主らが呼ばれてしまうと言う事になる。
そうして毎回お主らが拒否すれば……彼女は退学せざるおえまい」
「情に訴えかけるのはいい手段のように思える。じゃが、相手に何の義理もなければただ流されるだけじゃ」
「ほほほ、手厳しいのう」
なんと言うか、すでにお茶会に成っているな。アスナも用意された紅茶を啜り、茶菓子まで食べている。
「……オレは、別にかまわないんだがな」
ポツリと呟きながら、ポリポリと用意された茶菓子を齧っていく。すると、
「なら、問題ないわね？」
「ん？」
「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール五つの力を司りしペンタゴンこの者に祝福を与え我の使い魔となせ」
まるで早口言葉だと思った時には、
「ムグ？」
「なっ！？」
少女が、オレの唇に自分の唇を押し付けていた。
「ナニをやっておるんじゃ貴様はー！」
「ヘブラベバ！？」
再びアスナの蹴りで吹き飛ぶ少女。オレはと言うと、
「ぐあ……！！？」

左手に走る焼け付くような痛みに耐えていた。

「まぁなんじゃ、契約してしまったんじゃし後は当人たちで解決してくれ」

と、アスナにボコボコにされたオスマンは、さっさと出て行けと俺たちに手を振る。

その傍らには、同じくボコボコニされたコルベール先生。しかもご丁寧に残っていた僅かな髪の毛を根こそぎ毟り取られていた。……強く生きろコルベール。

そしてルイズはと言うと、

「ヒ、ヒィ……もう、ダメ……許して」

真っ白に燃え尽きていた。さすがに女の子相手に青痣が出来る様な事は良くない。アスナを止めたところ、代わりに少女――ルイズの両手両足を拘束して全身のいたるところをくすぐりまわした。

最初は健気に抵抗していたルイズだが、次第に抵抗しきれなくなり……あられもない姿で嬌声を上げ始めた。そして、アスナの出す条件を全て飲ませ、今は真っ白に成りながらオレの背中に背負っている。

先生達はアスナの所業を止めなかった。なぜか二人とも、あられもないルイズの姿を見て前屈みになっていたな……。

「で、女子寮に着いたが……ルイズの部屋は何処だ？」

「…もっと、上…の階」

まだ、まともに喋れないらしい。とにかくオレは階段を上っていく事にした。

途中何人かの女子生徒とすれ違ったが、皆オレに奇異の目を向けてくる。まぁ女子寮に見知らぬ男がズケズケと入ってくるなんて色々と問題があるだろう。

「そ、そこの部屋」

「……この部屋か」

アスナが、ルイズから鍵を貰い部屋の中に入っていく。
そこそこな広さのある部屋だ。使い込まれ、アンテーク感を醸し出している化粧棚にテーブルと椅子。窓の近くにある天蓋付きのベッドも、部屋の雰囲気を壊さないように配置されている。
「なかなかいい部屋だな」
「べ、別に褒めてくれなくていいもん……」
それから笑い疲れたので寝たいとルイズが言うので、オレは彼女をベッドに寝かせた。なんだか顔を赤らめているが……まぁいっか。
それからルイズが服も着替えさせてくれと駄々をこね、オレが解ったとルイズの制服のボタンに手をかけると、
「ナニやっとんじゃぬしらはぁ！！？」
「ベブラゾ！？」
再びアスナの蹴りを受け、俺は窓から部屋の外へと退場していった。

ゼロマ・1-2（後書き）

あとがきと言う名のナニカ

ミカ「今回より空気となってしまったマシンヘッドこと、ミカエルです。

今回よりあとがきを担当することになりました」

白「ゲストコメンテーターの白です。本名は伏せさせてくださいね？」

ミカ「白さん、いよいよ始まりましたねアルシャード・ゼロマ」

白「そんな事よりも、さっさと私の方を……」

ミカ「出自がばれそうな話題は止めましょう白さん。

それで本作の主人公……」

白「如月イツキさんですね？　なんでもアイディア出しで作ったキャラだとか……。チートじみた戦闘力を出す為にレベルをワザワザ高く設定したとか……」

ミカ「えぇ、マスターは高レベルクエスターとして作られています。だいたいですが、レベル１０のクエスターで高名なクエスター。レベル１５くらいのクエスターで世界有数と呼ばれるようになるとルールブックから読んで取れます。

ちなみに、マスターはレベル２０のクエスターです。もう少しがんばると神話級と呼ばれるのでしょうか？」

白「十分チートレベルな人ですね」

ミカ「アナタほどではありませんよ？」

白「……まぁいいでしょう。しかし、こちらのストックが溜まったからといって、もう一つの方をおざなりにされては堪りません」

ミカ「ですが、そちらの方も半分ほど書きあがったとか……最新話の投稿も近いのでは？」

白「それは本当ですか！？」

ミカ「そう言う事なので、今回はコレで終わりにしましょう」
白「はい、そうしましょう！」
ミカ「では、誤字や脱字、感想などありましたらご報告ください」

ゼロマ・1-3（前書き）

このＳＳはゼロの使い魔とアルシャード・ガイア（オリ主）とのクロスです。

ゼロマ・1-3

「……絶対、ギャグ補正とかじゃなきゃ死んでたな」
アスナに蹴り飛ばされて窓の外に投げ出されたオレは、何とか地面に着地して事なきを得ていた。しかし、改めてルイズの部屋のある場所を見てみると……かなりの高さがある。それなりに鍛えていなければ、本職のスタントマンでも無事ではすまないような高さだ。
「まったく、アスナのハッチャケぶりにも困ったもんだ」
最初はまだ大人しかったんだが、オレが買い集めているラブコメ漫画に触発されたのか、何かと手や足が飛んでくる。困ったもんだ。
「あの……大丈夫ですか？」
ん？　振り向くとそこには黒髪をカチューシャで止め、ゴシックなエプロンドレスを着た女の子――メイドさんが立っていた。
「ああ、大丈夫だ」
「そ、そうですか……ところで、どのなたですか？」
メイドは安心したように方を撫で下ろすと、今度はオレが誰かと聞いてきた。昨日まで見た事がない人物が学び舎の中にいるのは不自然極まりない。オレは服についた土埃を払うと、
「今日からルイズってヤツの使い魔になった、如月イツキだ」
「ルイズ……ミス・ヴァリエールですね。その使い魔……？　えっと、人間ですよね？」
メイドは、オレの身体を上から下まで観察する。べつに尻尾や翼、角なんかも生えてないぞ？
「ま……見てのとおりだ」
オレは両手を上げてアピールする。まぁ、オレも完全に人間って訳じゃないんだけどね。
メイドさんはなるほどと、納得すると自分の胸に手を当てて、
「私は、ここでメイドをやっているシエスタっていいます。キサラギイツキさんも何かあったら私に相談してください。微力ながら

力になります」
はにかんだ笑顔がまぶしい。頬に浮かぶソバカスもキュートだ。
……原作版だな。
「ああ、その時は相談させてもらうよ。
あと、フルネームだと言い辛いだろうし、イツキと呼んでくれ」
「えっと、イツキさんですか？　キサラギというのは……」
「ああ、苗字だ」
それからオレが家名持ちと言う事でシエスタが発狂し、オレの国では家名を持つのは当たり前なんだと説明したり……疲れた。

「お～い、イツキ～。こんな所におったのか」
シエスタが落ち着くと、アスナがなにやら服の入った籠を抱えて降りてきた。
「はにゃ！？　な、なんですかこの娘は？？」
「あ～、妖精……」
「ワシか？　ワシは妖精のアスナじゃ。よろしくな」
「そ、そうですか……妖精のアスナさんですか」
なんだか、放心したようにしています。まぁ、ソレよりも、
「ところでアスナ、その籠は？」
「ん？　ああ、これかの？」
そう言ってアスナは籠を持ち上げた。アスナ曰く、ルイズの洗濯物らしい。まだ日も高いためさっさと終わらせたいようだが……、
「えっと、アスナさん。もうすぐ夕方になるので……。
お洗濯は明日の朝に私たちがやります。ですので、その時に寮にいる担当のメイドに渡してください」
「？？　問題なかろう、乾燥機を使えばパパッと乾くだじゃろうに……」
「カンソウキ？？　なんですかソレ？？」
……そう言えば、ここは科学技術がまったくと言っていいほど発

展してないんだよな。洗濯だって板を使った手洗いに自然乾燥だ。文明の利器である乾燥機なんてそもそも発明されていない。
「にゃんじゃとー！？　洗濯機も乾燥機もないのか？」
「えっと……それがどう言う物かは存じませんが、洗濯は洗濯板で。乾かすのはお日様で自然乾燥です」
ソレを聞いたアスナが、そんなバカなと口をあんぐりと開けていた。
とりあえず、洗濯物は明日に回す事にして、代わりにオレ達は空腹を満たすため、調理場に行き賄いを分けてもらう事になった。
そう言えばルイズの事をアスナに聞いたが、笑いつかれて眠ってしまったらしい。
「マルトーさ～ん、賄いってまだありますか？」
「ん、シエスタか？　今仕込んでいる最中だが……そいつは誰だ？」
「はい、この人は今日からミス・ヴァリエールの使い魔をやる事になったイツキさんです」
「イツキです。はじめまして」
「ああ、ここでコック長をやっているマルトーだ。
それにしても人間が使い魔に？？」
オレは左の弓手甲を外すと、その下に刻まれたルーンを見せた。
「これが使い魔の証ってヤツらしいですね。まぁ、焼印みたいな物だな……」
「……おめぇさんも大変だな。よし、賄くらいなら分けてやるさ。それにしてもお前さんの主は使い魔をほっぽらかして……」
まぁ、こっちのしでかした事情で寝込んでるんだけどね。そんな風に思っていると、
「おぉ～！　美味そうな匂いじゃのう！」
「な、なんだこのちっこいの！？」
アスナが、いつの間にか鍋に張り付いていた。
「おい、アスナ！　鍋にくっついてるんじゃない！」
「おぉ、すまんのう。とても美味そうな匂いじゃったのでついな」

そう言って鍋から離れると、羽を広げてフワフワとオレの肩に止まる。ソレを見て、調理場にいた全員が固まった。
「ふむ……どうやらワシのせいかのう？」
「いや、十中八九アスナのせいだろ？」
まったく、そんな事も判らんのか。
「致し方ない……ワシの名はアスナ。見てのとおり妖精じゃ。
……と、そこのオヌシ、イツまで呆けておるきじゃ？　そのままではフライパンが焦げてしまうぞ？」
アスナの指摘で我に戻ったコックの一人が、急いで自分のフランパンをかき回す。それに続いて鍋をかき回していた者や食材を切っていた者達も自分の作業に復帰する。
「はぁ……、すまんマルトーさん。うちのアスナが迷惑をかけた」
「……いや、まあいいさ。それより妖精って言うのはホントなのか嬢ちゃん？」
「うむ、そうじゃ。剣精アスナとはワレの事じゃ！」
なんだか、かなり尊大な感じが出てきているぞアスナ？　オレは、そんなアスナの後頭部にデコピン（？）をお見舞いしてやる。えばるな。
それからオレ達は賄いを貰い……アスナが明らかに何処にしまったんだって言う位の量を食べていたが、自重しろ。そう言えば、マルトーさんはアスナの食いっぷりにえらく感心したようだった。
それから、マルトーさんに夜食としてサンドイッチを作ってもらった。もしかしたら、途中で起きたルイズが食べるかもしれないと考えたからだ。まぁ、もし彼女が食べなくてもアスナの胃の中に消えるから、そこら辺は問題ない。

結局、その日はルイズが目を覚ます事はなく、用意したサンドイッチは全てアスナの胃袋の中に消えていった。

＊

チュンチュンとか、鳥の鳴き声が聞こえて来そうな朝だ。けして事後とかの朝じゃない。すがすがしい朝だ。

だが、少しだけ日が高い気がする。オレは手首に巻いていたアナログの時計を確認した。この世界の時間の流れが、オレの元いた世界と同じかは保障できない。だが、大体の時間は解るはずだ。

「8時……か」

うむ、いつもより早く起きれた気がする。いつの間にかミカがお昼ご飯を作ってもいないし、アスナが晩御飯を作ってもいない。……丸一日寝ていたのならその限りではないが。

とりあえずオレは寝袋から出ると、アスナを肩に乗せてルイズを起こすため彼女が羽織っている毛布を引っぺがした。

「……」

そして、オレは固まった。

あれ～？　なんで？　ルイズを寝間着に着替えさせたんじゃないの？

別にルイズが制服のまま寝ていたわけじゃない。

いや、事前に確認しなかったオレも悪いと思う。

だって、毛布の下がまさかこうなっているなんて思っても見なかったんだ！

彼女は、……何も着ていないのだ。

ネグリジェも着ていない。

一糸纏わぬ生まれたままの姿のルイズが、ベッドの上で寝息を立てていたんだ。

アスナさん、いくら制服を着たまま寝せられないからって……。

「……ん？　もう朝かイツキ？」

「ん？　もう朝なの？」

アスナとルイズの二人が、絶妙なシンクロ率で目を覚ました。不味い。ひっじょ〜に不味いぞオレ！！
オレが毛布を手にして硬直し、目を覚ました二人が状況を確認する。
そして、
「キャァァァァァァァァァァァァァ！！！！」
「こ〜の、おおたわけがー！！！」
「ヘベロバンボ！！？」
耳をつんざくルイズの絶叫が女子寮に響き渡り、アスナの全身全霊の脚撃がオレを吹き飛ばした。オレはアスナに蹴り飛ばされ、その勢いのまま部屋のドアをぶち破り廊下に吹き飛ばされた。
「な〜にルイズ、朝からうるさいわよ？
あら、アナタは誰かしら？」
かなりキツイ痛みに耐えながら、オレは声の主を見た。
褐色の肌にオレとは違う赤い髪、胸元を大きくはだけさせた制服に収めされたルイズと正反対の巨乳。一歩はずれるとコギャルで通りそうな彼女は、ルイズの部屋の中とオレを交互に見て手を口に当てていた。
そして、
「と、とうとうルイズにも春が来たのね。
無理やりってのがいいか判らないけど……とりあえずおめでとう」
彼女は、どこかニヤニヤとした笑みを浮かべていた。
「イヤァァァ！！」
なんと言うかもう、カオスだ。
「あーもう！　ツェルプストーにこんな弱みを握られるなんて最悪だわ！！
こうなったのもアンタのせいよ、解ってるの！！？」
今朝の事に激怒しながら、ルイズは今教室に向かっている。オレ

は、その後ろで二人につけられた青あざを水で濡らしたタオルで冷やしていた。
「朝の事は、確かに俺の責任だ。
だが、ルイズを裸で放置したアスナにも責任はあると思うぞ？」
「なんじゃ、イツキはこんなか弱い乙女に責任を擦り付ける気かのう？」
「異議あり！　そのか弱いって所は絶対にまちが……フベラバ！？」
「どうやら、まだ青あざが欲しいようじゃのう？」
アスナは、そう言って俺の顔にめり込んだ足を引き抜く。止めろ、これ以上蹴らないでくれアスナ。ただでさえ、さっきの事で二人から受けた攻撃が効いてるんだから。
「早く来なさい！　今日最初の授業に遅れちゃうでしょ！？」
どうやら、ルイズは今朝の事でかなりご機嫌斜めなようだ。加えてオレ達は朝食を取っていない。空腹感も手伝って、彼女の機嫌はマッハの勢いで不機嫌だった。

ゼロマ・1-3（後書き）

あとがきと言う名のナニカ

ミカ「こんにちは皆さん。もう空気でかまわないミカです。
ゲストコメンテーターだった白さんが人形を残して消えてしまった」
シエ「ですので、今回のゲストコメンテータを勤めますシエスタです」
ミカ「ゼロマ系のＳＳでは、色々と出自や種族等が変わる事で有名なメイドさんです。このＳＳでは、どうなるんでしょうか??」
シエ「言わないでくださいミカさん……。すいませんお酒、持ってきてくれませんか？　え、ダメですか……」
ミカ「自重しなさい。　そうだ、今度料理を教えてくれませんか？
大切なマスターに手料理を振るいたいんです」
シエ「かまいませんが……、産廃物の量産なら他を当たってくださいね？」
ジャカ！
シャキン！

アスナ「第一スタジオで事故が発生したので、第二スタジオからワシ、アスナがレポートを開始するぞ？」
ルイズ「ゲストのルイズです。って、よくも裸にしてくれたわね！！」
アスナ「まて、そうさせたのは作者じゃか……！」
ルイズ「問答無用！」
チュドーン！！

ロングビル「収集が付かなくなったので、一旦ＣＭに入ります」

ＣＭ「誤字、脱字等ございましたらご報告ください。
感想も受け付けております。
……提供、皆様の思い」

ゼロマ・1-4（前書き）

このＳＳは、ゼロ魔とアルシャード・ガイア（オリ主）のクロスです。

ゼロマ・1-4

教室に入ったオレ達は、なんとも言えない奇異の視線を向けられた。

「……こっちよ」

ルイズは、そんな視線など無視して大学の講堂の様な教室の一番奥の席に座った。

オレ達はと言うと、ルイズの座った隣の席に腰を落ち着けて、オレ以外の使い魔たちを観察していた。大半が猫やカラスにフクロウといった（ブルースフィアでも）使い魔としてポピュラーな者達で、少数だがバグベアードやバジリスクといった妖魔――奈落の気配が感じられないので純粋に幻想種とか言うべき者達まで使い魔として使役されていた。

ここにいる使い魔たちを観察する限り、それほどまでに強い（レベルの高い）ヤツはいない様だ。単体戦ではまず……、

「……そうよ、少しでもいい方に考えないと……」

「ん？」

なにやら隣でルイズがぶつぶつ言っている。そんなルイズを、アスナはトテモ良いニヤニヤ顔で見ていた。

……まぁ、強く生きろルイズ。

そんなこんなしていると、恰幅の良い紫のローブを着た女性の先生が教室に入って来た。

「ささ皆さん、授業を始めますよ～」

先生の号令に、他の生徒たちは慌しく自分の席に突いて行く。だが、オレ達の周りには誰も座らない。……いや、二人いた。

「はぁ～い、ルイズ。隣良いかしら？」

今朝会った赤い髪の女性。その後ろには、青い髪のルイズよりも

小さな少女がいる。
……キュルケとタバサだな。
「……別にいいわよ」
もう授業が始まるからなのか、ルイズは比較的大人しくした。だが、ルイズは頬を膨らませて『大いに不満ですよ』と言うアピールをこの赤い髪の女性に向けて行っている。なんと言うか、どこか子供っぽくて微笑ましい。
「みなさんおはようございます。二年生最初の授業はこの私、“赤土”のシュブルーズの授業になります。
なぜ私の授業が一番なのかと言うと、新二年生が召喚した使い魔をいの一番に見たいからなんですよ」
……何と言うか、職権乱用（？）――私利私欲な発言を平然としてくれる先生だな。
それからシュブルーズ先生は、教室中の使い魔を見て回ると、
「皆さん、とても良い使い魔を召喚できたようですね」
と、取り分けて問題の無い発言で締めくくった。ふむ、このシュブルーズ先生はうっかり発言はしなかった様だ。……となると、
「シュブルーズ先生！　“ゼロ”のルイズが使い魔を召喚できてませんよ？？」
「おい“ゼロ”のルイズ！　召喚できなかったからってそこら辺歩いてた平民を連れてくるなよ！」
やはり、幼稚な野次が飛んできた。それにルイズが声を荒げるかと思ったが、別の方から声が飛んできた。
「い～え、彼女もちゃんと使い魔を召喚し、ちゃんと契約を結びましたよ？
オールド・オスマンからも、よしなにのお達しが来ています。
それより、同じ学び舎で学ぶお友達をゼロだとバカにするのはいけませんよ？」
シュブルーズ先生がそう言うと、野次を飛ばしていた生徒が信じられないと言った風にオレ達を見てくる。オレは一つため息をつく

と、
「ガキども、さっさと座れ。先生が授業を始められなくて困ってるぞ？」
「……チッ」
その生徒は小さく舌打ちすると自分の席に着席した。まぁ、授業を妨害すると先生の評価がガタ落ちしたりして大変だからな。それからオレは、不燃焼気味のルイズをなだめて席に着かせた。
そう言えば、あんな事を言うヤツには問答無用で蹴りを入れるだろうアスナは……、
『調理場で飯を食ってくる』
と、書置きを残して消えてしまっていた。あのヤロウ……。
「ありがとうミスタ、これで授業が始められます」
それからシュブルーズ先生の授業が始まった。

この世界――ハルケギニアで一般的に知られている魔法は始祖ブリミルが広めた火・水・風・土の四大系統魔法と、その基礎の様なコモンマジック。それからエルフなどの極一部の幻想種が使用できる精霊魔法……。他にも未知の魔法は存在するかもしれないが、オレ達が今までいたブルースフィアにあった魔法（スキル）には無いモノが多い事は確かだ。
オレは、いざ戦闘になった際に少しでも知識が役に立てばと授業を受けているのだが……。なんと言うか、授業内容がゾンザイだ。アバウトな魔法の説明と、
「イメージが重要です」
と、言うアドバイスなのか判らない事だけが教えている事だ。……先入観とか偏見、固定概念を持たない様にするための授業なのか？？
「では、〈錬金〉の実演を……ミス・ヴァリエールにお願いしましょうか」

そして、ルイズがシュブルーズ先生に当てられると、教室の中の気温が一気に二度ほど下がった気がした。
「考え直してくださいミス・シュブルーズ先生！　ルイズだけは絶対にダメです！！」
「あら、どうしてかしら？　ミス・ヴァリエールはトテモまじめでいい生徒だと聞いていますよ？？」
「ミス・シュブルーズ先生は、ルイズの授業を受け持った事がありませんよね？　だからあの怖さが解らないんです！！」
ギャーギャーと周りが騒ぐ中、オレはルイズに視線を向け、
「……で、肝心のルイズのやる気はどうなのかな？」
先生たちの問答は別にして聞いた。
「もちろんあるわよ！　見てなさい……」
自信たっぷりなのか虚勢なのか解らないが、ルイズは立ち上がると私がやりますと宣言した。
「か、考え直してルイズ！」
「ふん！　見ていなさいツェルプストー！！」
鼻息を荒く、と言う言葉がぴったりな感じだな。ふむ、
「ルイズ」
「あに……！？」
プニュ～。
振り向いたルイズの頬に、オレの人差し指がめり込んでいる。本当にプニュっと言う擬音が聞こえて来そうなくらいだ。
バコン！
ルイズの右ストレートが、オレの顔にメリ込む。
「な、あにすんのよ！！」
「ああ、肩に力が入りすぎてるぞ？　もっと楽にしていけ」
「ふん、アンタに指摘されなくても解ってるわよ！」
オレの思惑とは逆に、ルイズはさらに肩に力を入れて教壇の前に立った。
「もう、余計な事してくれちゃって！　どうなっても知らないから

ね！！」
赤い髪の女性――キュルケが、この世の終わりとも取れる様な悲鳴を上げながら机の下に隠れた。他の生徒も同じように、次々と机の下に隠れていく。例外は、隣の青い髪の少女――タバサが誰よりも早く教室から姿を消したぐらいか……。
そして、
「ブツブツブツ……」
ルイズの詠唱が始まった。
オレは席を立つと、教壇の上の小石が良く見える位置に立った。
「……〈錬金〉！」
ルイズの魔法が完成し……、だが本来求められる結果とは違う、因果変質が発生し始める。オレは、それを冷静に見据えると〈破魔の瞳〉を発動させた。
グッ！？　なかなか強力な魔法だ。だが、オレは負けん！！
パンッ！
そして、爆竹が弾けた様な音と共に、ルイズが〈錬金〉をかけた小石が火花を上げて割れた。小石が置かれていた場所は黒く焦げ付いている。
その音を聞いて、恐る恐る他の生徒が机の下から顔を出して何が起こったのかを確認しあっている。シュブルーズ先生も突然の爆発に驚いたようだが、目をパチパチとさせながら教卓の上を覗き込んだ。
オレは、砕け散った小石を見て、
「ふむ……“炭”が出来たな」
と言った。シュブルーズ先生もぎこちなく肯くと、
「え、えぇ……その様ですねミスタ。
ミス・ヴァリエール、今度は金属が〈錬金〉できるように頑張りなさい」
「は、はい……」
ルイズは、シュブルーズ先生に一応肯くと、自分の席に戻るよう

に促されて戻ってきた。オレもまた自分が座っていた席に座る。
その後、生徒たちが全員元の様に席に着くと授業が再開される。だが〈錬金〉の実演は最後まで行われず、そのままつつがなく授業は終了した。
そうそう、ルイズはと言うと、終始不思議そうな顔をしながら授業のノートを取っていたとだけ言っておこう。

ゼロマ・1-4（後書き）

あとがきと言う名のナニカ

アスナ「剣精アスナじゃ。
前回のあとがきで、皆使えなくてしまったからワシが今回担当する」
テファ「げ、ゲストコメンテーターのティファニアです。あの、私なんかがココに来ていいのでしょうか??」
アスナ「かまわん。オヌシはアルビオン編に突入せんと出る機会のないのじゃ。ここで出ておかんと損をするぞ??」
テファ「そ、それもそうですね。
では、今回こんな質問が届いていますので答えていただきましょう。
アスナさんのマジ突っ込みを食らってイツキさんが生きているのは、ルール的にはブレイクですか？　だそうです」
アスナ「う〜む、この質問に答える前に言わねばならん事がある。
色々と勘違いされているようじゃが、ワシはクエスターでもなんでもない。イツキが持っておる魔剣に宿っておる妖精じゃ。
じゃから、ルール的に表すとエキストラじゃな。
近い存在は『リプレイ・神々の贈り物』の主人公の一人、クロードの持っている魔剣・リリスじゃな。
あれは魔剣そのものがエキストラじゃが、ワシはアバターを出現させて剣と別離で行動できるのだ」
テファ「なるほど……」
アスナ「じゃから、ワシがどんなに激しく突っ込んでも、ゲームでのルールでは演出にしかならん。つまり、イツキはブレイクしておらん」
テファ「説明ありがとうございますアスナさん。

……あの、そぼくな疑問が出たんですが」
アスナ「なんじゃテファよ？」
テファ「アスナさんの“本体”で突っ込みを入れたら、どうなりますか？？」
アスナ「……たぶんじゃが、ブレイクするかのう？」
テファ「なぜ、そこで疑問系なんですか？？」
アスナ「いや、試した事がないのと……アバターの腕力じゃ自分の“本体”を持ち上げられんからな」
テファ「そうなんですか？　……そう言えば、アスナさんはどんな剣に宿ってるんですか？？」
アスナ「ん？　ん～、もう直ぐ分かるからココでは説明はしないでおこう。
　む、そろそろ時間じゃ。
テファ「あ、もうそんな時間ですか？？
　では、誤字や脱字などありましたらご報告ください」
アスナ「オヌシらの感想もまっておるぞ！」

ゼロマ・1-5（前書き）

このＳＳは、ゼロ魔とアルシャード・ガイア（オリ主）のクロスです。

ゼロマ・1-5

「うにゅ〜、このシチューは今までに食べた事がないほど絶品じゃのう！」
「オウ、そこまで褒めてくれるのかチビッ子！　オレは今、猛烈に感動しているぞ！
……だから、もうそろそろ御代わりを止めてくれねえか？　他のヤツの分までなくなっちまう」
　満面の笑みを浮かべながらシチューをパクつくアスナと、鍋の中の残りを気にしているコック長のマルトーさん。オレは、それを見ると突然頭痛が襲って着たような気がしたが、これは幻痛だ。そうだと言ってくれ！！　……一応、頭に手を当てたい気分を払いのけると、オレはアスナの両の頬をハシと掴む。
「およ？」
　そして、
「少しは自重しろ〜！！」
　ビヨ〜ン、
「イダダダダ！？」
　うむ、アスナの頬はよく伸びる。まるでつき立ての餅の様だ。
「すみません、うちのアスナが迷惑をかけました」
　痛がるアスナを尻目に、オレはマルトーさんに謝った。こいつの胃袋は文字道理“底無し”だ。だから誰かがストッパーにならないといけない。今しがたチラッと見たが、賄い用のシチューが入った一抱え以上もある鍋の中身が半分まで消えていた。
「ま、まぁいいって事よ。チビッ子の食いっぷりには驚かされたが……ああも美味しく食べてくれると料理人冥利に尽きるってもんよ」
　寛大な人だ。オレは一生懸命に頭を下げて謝り、そして代わりに何か手伝いをさせてくれと頼み込んだ。さすがに本職でもないオレが厨房に立つ事は出来ないので、巻き割りや昼食後のデザートの配

膳を手伝わせてもらう事になった。

＊

なぜオレが調理場にいるかと言うと、アルビーズ食堂が貴族のための食堂であると昨日のうちにシエスタに聞いていたからである。ルイズに、

「オレがいると、あのガキどもが嫌な顔するだろ？
オレは、そんなヤナ雰囲気で食事したくないね」

と、説明してやった。それに、

「オレは、アスナ（のやる事）が心配だから調理場を見てくる。ついでに昼食はそこで貰っておくよ」

と言って、何か言いたそうなルイズを尻目にオレは調理場にやって来た。そして、先ほどのやり取りを見たわけだ。

それからオレは、マルトーさんに事情を説明し自分の分の賄をを受け取ると、さっさと食べ終える事にした。それをうらやましそうにアスナが見ているので、

「後一杯だけだぞ」

と言ってやった。が、それは間違いだった。

アスナは、事もあろうにアイツ自身がすっぽり入れそうな――桶程の大きさの、もはや食器と呼ぶべきか解らない様なモノを満面の笑みで抱えていた。その姿だけ見ると、お持ち帰りしたいくらい恐ろしく可愛い絵なのだが、オレはそんなＫＹな妖精アスナをその食器と呼ぶに値しないモノに押し込み蓋をしてやった。

ダセー！　とか、冗談じゃったんじゃ！　とか聞こえて来たが……、

「少し頭を冷やしてなさい」

そう言って、少し開けた蓋から水を注ぎ込んでやった。

「ガボガボ！？　や、止めるんじゃイツキー！！」
ふふふ、普段のお前の行いが悪いんだからな！　……まぁ、アスナは透過できるから何の問題も無いんだがな。

用意してもらった賄いを御代わり込みで平らげると、オレはデザートの配膳を行うためシエスタと一緒にカートを押してアルビーズ食堂にやって来た。
「どうぞ、デザートのケーキになります」
「ん……って、何でアンタが給仕の真似事してるのよ！？」
桃色少女のルイズが素っとん狂な声を上げる。オレはひとつため息をつくと、
「ああ……アスナがな、コック達が用意していた賄いの半分を食べちまったんだ。だから、これはその後始末みたいなもんだ。あのままだと、後々調理場を利用しづらくなる」
などとオレが言うと、ルイズは苦労してるのねと同情を寄せてくれた。
さて、オレがケーキを配っていくとあからさまに敵意むき出しのヤツが何人かいたが、そこは完全にスルーする。一応は、魔法で悪戯されないように〈破魔の瞳〉を光らせておく。
そして、そのまま配り進めていくと食事を終えた学生数名が固まって話し込んでいた。
「おいギーシュ、今誰とつき合っているんだ？」
「つき合う？　僕は、特定の誰かとはつき合っていないさ。なんせ女性皆に好かれる薔薇なんだから！」
なんと言うか、バカバカしいくらい自称モテルバカの会話だ。オレはさっさとケーキを配ろうとして足を伸ばし、足元に転がっていた小瓶に気づかずにそれを蹴ってしまった。そして、その小瓶は床の上をスルスルと滑って行き、
「ギーシュ様～」

パリ〜ン。
駆け寄ってきた茶色いマントを着た少女によって粉みじんに踏み砕かれた。
「あれ？　なにかしら……？　まぁいっか、それよりギーシュ様〜」
そして、脂汗を滲ませながら笑顔で出迎えるギーシュ。その反対側からは、金色の髪を立てロールにした少女が般若のお面をつけてやってくる。
……その後の展開は語るまでもない程に酷い物だった。
あえて言うと、般若の少女がワインで作った水流で二人を食堂の外に押し流し、その後二人とＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩに突入。そして、フリルで改造した制服の男子の首根っこを掴むと往復ビンタで止めを刺した。
金髪の少女の摂関が終わると、もう一人の少女も顔を真っ赤にして杖を取り出した。そして、ボコボコニなった少年をそのまま〈トンネル〉（？）で埋葬していく。だが、少女は最後まで見届けずにその場を去っていった。
オレは、泣きながら去っていく少女達を見ていたたまれない気持ちになった。が、まずはこのバカを掘り起こす事が先か？　……いや、事の次第を見ていた野次どもがオレよりも先にギーシュを掘り起こしてくれた。
面倒な事をしなくて住むとその場を去ろうとした時、
「待ちたまえ君！」
……まったく、面度はゴメンだ。オレは、そのまま気づかぬ振りをして歩みを進めると、
「そこの紅い髪を後ろで縛り、変なローブ（長衣）を着た君だ、待ちたまえ！」
はぁ、まったく……。
「なんだ？　一応、オレは仕事で忙しいんだ……手短にしてくれ」
「ふん！　礼儀の一つもなっていないようだな。そんな君のせいで、レディが二人も傷ついたではないか！」

「ん？　どうしてそうなるんだ？？」
「そんな事も判らないのかい？　君が、不用意に愛しのモンモランシーの香水を蹴ったりしたからこんな事になったんじゃないか！」
「ふむ、そんな事があったのか？」
　オレは、とりあえずすっ呆けておく。それに腹を立てたのか、少年は鼻息を荒げると造花の杖を取り出し、
「とぼけるのもいい加減にしろ！　僕はちゃんと見たんだ。君は、自分が蹴り飛ばした香水の行き先をずっと追っていたじゃないか！」
　ふむ、意外と周りを見ているようだな。
「あぁ、そんな事もあったか……だがそれは、この件の直接的な原因ではないだろ？」
　オレの指摘に、そうだそうだ二股をしていたお前が悪いと、外野が野次を飛ばしてくる。
「ぐぅ……もうかんべんならない！　決闘……！！」
「だが断る！！！」
「な……！？」
「キサマの怒りの捌け口になってやる義理も無ければ、これ以上仕事を遅らせて他の奴らに迷惑をかけられんからな」
「なら、僕の前で膝をついて謝りたま……」
「お門違いもたいがいにしろ！　謝るのはキサマの方だ！　さっさとあの二人の所に行って謝って来い！！」
　オレは、圧倒的な覇気を少年に撃ち放つ。それに押され、少年は後ずさった。……ん？　いつの間にか、シエスタが青い顔をしながらオレの腕を掴み『謝ってください。出ないとあなたの命が！』とか、小声で言ってくる。だが、
「ガァァァ！！」
　少年の怒りのバロメーターが振り切れたのか、杖を振り上げて造花の花びらから四体の人形を作り出し襲い掛かってきた。
「ひっ！」
「チッ……」

小さく悲鳴を上げるシエスタを抱え上げ、オレは接敵される前にその場から飛びのくと広場の中心へと躍り出た。
「ギーシュ・ド・グラモン参る！！
逃げられると思うな！！」
もう、無理やりにでも決闘をして自分の言い分を通す気満々だな。
「貴族をコケにした事、後悔するんだな！！
行け、ワルキューレ！！」
片手持ちの長剣に斧と槍を掛け合わせたハルバート、両手持ちの斧やハンマーと言った一般人にとって十分に凶悪な武器を装備した四体の人形――ワルキューレが、オレ達に殺到してくる。
不味いな。ワルキューレの能力は……、何の訓練もしていない一般人より若干上程度。だが、シエスタを守りながらだと幾分か不利だ。
だが、
ボコ！
「な……！？」
〈マーシャルアーツ〉の特技は取っていないが、格闘戦（素手）が出来ないわけじゃない。オレのコブシが決まったワルキューレは、頭部が完全に陥没してそのまま崩れ落ちた。それに驚いたのか、一瞬だけワルキューレの動きが止まる。
おいおい、戦場で足を止めるたぁ……キサマ、死にたいようだな？
一瞬の隙を突き、オレはワルキューレの囲いを抜ける。だが、直ぐに我に帰ったギーシュが追加のワルキューレを三体作り出し行く手を阻んでくる。オレは、一番近い場所にいたワルキューレに取り付くと、足払いの要領で地面に叩き付けた。
グシャっと言う音を立てて、地面に叩きつけられたワルキューレのあちらこちらがへっこむ。まだ動けそうか？？
「く、負けるか！！」
それを見て、幾分か正気に戻ったギーシュは残ったワルキューレ

達を一旦下げさせる。
そして、合計六体になったワルキューレの武器を全てハルバートに切り替えた。
ワァァァ！　と、一斉に外野の野次馬たちが盛り上がりを見せる。まったく、ヒマな奴らだ。
「さぁ、これで終わりだ！！　地面に膝をついて許しを請うなら、そのメイドの命だけは助けてやろう！！」
ギーシュの言葉に、スッと目が細まる。オレの手の中でガタガタと震えるシエスタも、もう限界が近い。
「言いたい事はそれだけか？」
〈夢幻の刃〉で生まれた〈炎〉が、オレのコブシ中心に燃え上がる。そして、それを後押しするように〈勝利の風〉が握り締めるコブシに更なる力を与えた。
「な、なんだそれは！？　き、君はいったい……！！？」
「オレか？」
何処からか聞こえてくる熱くなる様なＢＧＭをバックに、オレはギーシュに向かって一歩一歩近づいていく。
「ひっ！？　わ、ワルキューレ！！」
ギーシュの命令に、待機していたワルキューレ達が一斉に襲い掛かってくる。
「知りたければ教えてやる！」
だが、八方から襲い来るワルキューレの攻撃全てを、オレは〈スペシャルパワー〉で強化された力でその全てを回避しきる。
「トリステイン魔法学園二年！」
そして、代わりにオレの燃え盛るコブシをワルキューレに叩き込む。引き千切れる様に倒れていくワルキューレ達を尻目に、オレはさらにギーシュに向かってさらに歩みを進める。
「ルイズ・ド・ラ・ヴァリエールが使い魔！」
後ろから襲い掛かってくる奴らは、一旦しゃがんで攻撃を回避し、振り返りざまに炎を纏った蹴りで一蹴する。

最後に、ギーシュを守っているワルキューレを殴り倒すと、
「如月イツキだ！！！」
オレはギーシュの頭をわしづかんだ。
コブシの炎はすでに消えている。だが、頭をわしづかんだ手はギシギシとギーシュの頭を締め付けていく。ガチガチと歯が噛み合わず、青い顔をするギーシュをオレは睨みつけ、
「まだ続けるか？」
「僕の……完敗だ」
オレの問いに、ギーシュの応えは素直だった。

ゼロマ・1-5（後書き）

あとがきと言う名のナニカ

アスナ「剣精アスナじゃ。あとがき劇場始めるぞ～」
テファ「ゲストのテファです。
今回はよく食べましたね～アスナさん」
アスナ「むふふ、マルトー殿の料理はなかなかの一品じゃった。
おぬしも、一度は食べに来た方がいいぞ？」
テファ「そうですね～、私も学校に通えるようになったら食べられるんですよね～（遠い目）」
アスナ「まぁ、それまで待つ事じゃな！」
テファ「そう言えば、今回のギーシュさんとの戦いですが……」
アスナ「なかなかのフルボッコじゃな」
テファ「いえ、どこかで見たことがある様な気がするんですけど？？」
アスナ「うむ、それはアップ主がニコニコで見たモノを参考にしたからじゃな。もっとも、あっちはロボットじゃったが……」
テファ「それに、シエスタさんを庇いながら戦いましたよね？？」
アスナ「うむ、フラグかのう？？」
「「……」」
テファ「そ、そう言えば、またアップ主さんがキャラクターシートと睨めっこしていましたよ？？」
アスナ「修正かのう？？」
テファ「いえ、なんていうか……作っていたような？」
アスナ「新キャラかのう？」
テファ「なんか、アスナさんの名前がかかれてました。あとシエスタさんとかも……」
アスナ「……ま、まぁよい！　それでは、今回はコレにて終了！」

テファ「誤字や脱字などございましたら連絡をお願いします」
アスナ「感想もまっておるぞ！！」

ゼロマ・1-6（前書き）

このＳＳは、ゼロの使い魔とアルシャード・ガイア（オリ主）のクロスです。

ゼロマ・1-6

Anahter side

あ～もう！　なんで今日はこんなに嫌な気分になるのかしら？
私は、そう思いながらデザートのケーキをパクついていた。もう何個目だっけ？　ひのふの……うん、見なかったことにしよう。
「ワァァァ！」
ん？　なんか外が騒がしいわね……って、ちょっとぉ！！？
「あのバカ、何やってんのよ！？」
嫌な気分の原因の一つであるあの男が、ギーシュを相手に戦っていた。しかもメイドを抱きかかえている。
……大方、要らぬいちゃもんをつけられて決闘を吹っかけられたのだろう。あのメイドにも被害が行っているみたいだし……。私は、二人に決闘はダメだと注意しようと立ち上がったが、
「なぁぁ！？」
アイツのコブシから、いきなり炎が燃え上がったのだ。かと思うと、次の瞬間にはギーシュのゴーレムが吹き飛んで壊れていた。私は、とても信じられないものを見てしまったと思い自分の目をこするが、やはり現実は変わらない。
その後、アイツはギーシュが新たに呼び出したゴーレムたちに囲まれるが、それを次々と蹴散らして行き、最後にギーシュの頭をわしづかんだ。そして、
「まだ続けるか？」
「僕の……完敗だ」
ギーシュが、自分の負けを認める。
勝ってしまった。それも、完膚なきまでにのパーフェクトゲームだ。
私は純粋に凄いと思った。次いで、私は何をやっているんだと怒

りたくなり……色々と言ってやりたくなってアイツの元に駆け寄って行った。
……いや、駆け寄って行こうとしただけだった。

これが、誇り高きトリステイン貴族のやる事なの！？

Another side end

オレは、ギーシュの頭を完全にホールドしてこの決闘紛いの喧嘩に勝負をつけた。
「ッ！？」
だが次の瞬間、オレ達に向かって火球が飛んで来た。咄嗟にギーシュを突き飛ばし、さらにオレ自身は後ろに飛んで襲ってきた火球をギリギリで回避する。
「……な！？　いったい誰……ッ！！？」
しりもちをついたギーシュが、驚いた様に誰何する。
「すっこんでろ、トリステインの恥さらしめ！！」
だがこれは、もはや“誰か”と呼ぶべきじゃない……。その場にいたほぼ全員――マントの色が違うが殆どの男子生徒が、オレに敵意をむき出しにして杖を構えていた。正確に数えたわけじゃないが……ざっと五十人位か？　その大半が茶色いのと黒いマントを着けた――一年生と二年生だ。紫のマントを着けた三年生も数人だがいる。
はぁ……、
「まったく、とんだ“貴族様達”だな！
結果が気に食わなかったら、リングに物騒な魔法を投げ込むのがオマエらの流儀ってか？」

オレがそう言うと、さらに石のつぶてや氷の矢、挙句の果てに火達磨になった槍まで飛んで来やがった。まったく、
「……つくづく躾がなってない様だな、おい？」
「平民ごときが、いきがるんじぇねぇ！！」
「“ゼロ（無能）”の使い魔の癖に、生意気なんだよ！！」
「あの生意気な平民を躾けて、トリステイン貴族の矜持を回復させるんだ！！」
……ムカつく野次だ。ルーンの力云々はともかく、自分の立っている場所（地位）が判っていないセリフばかり吐く生徒に苛立ちを覚える。
そして、誰かの掛け声と共に魔法が打ち込まれて来た。
次々と打ち込まれて来る魔法を、オレは紙一重で回避し続ける。
さすがに、シエスタを抱えながらだと思う様に動けないな……。身体の所々に、魔法がかすった跡が付き始めている。
まいったなぁ、オレは多人数（モブを除く）と相性がメチャクチャ悪いってのに……。
そう言えば抱きかかえたままのシエスタだが、
「ハラホレ……」
ノンキに目を回して気絶していた。極度の緊張と恐怖が、彼女の意識のブレーカーを落とさせえたんだな。
そこでふと、オレの頭の中に妙な囁き（ＧＭの進言）が響いた。
『え～、この状態のシエスタはアイテムとして扱います』
アイテムとして扱う……彼女を収納バッグにしまっていいのか？
……って、ダメだろ！！
頭から腰のバッグに飲み込まれていくシエスタ！
その後、腰から生首が生えるみたいに取り出されるシエスタ！！
どっからどう見ても猟奇的じゃねぇか！！？
「もらったぁ！！」
「グッ！？」
ッ～！？　油断した。避けそこなった炎を纏った槍がオレの足を

抉っている。それを見て、暴徒どもが好機とばかりに魔法を撃ち込んで来る。
だが、まだだ！！
〈夢幻の刃〉で手に〈氷〉の力を纏わせる。
そして、足元に突き刺さった槍を掴み一息に引く抜くと、抉れた足の痛みに歯を軋ませながら〈氷〉を纏った槍を構え、
「ハァァァ！！」
ガキキキン……！！
迫り来る魔法の凶刃を叩き伏せた。
「……どうしたバカガキども？　それで全力か？？」
オレの挑発に、再度場が殺気で満ちる。
……まったく、いつになったら教師どもが止めに来るんだ？　オレは〈破魔の瞳〉の力を頼りに、本塔の一番上の部屋からこちらを除き見ている気配を睨みつけた。
「……見て見ぬふりか？」

Another side

なんで、こんな事するのよ！
もう決闘は終わったじゃない！
あなた達には、トリステイン貴族としての誇りはないの！？
……どれも、私が言いたかった事。だけど、私の口からは何も出ない。
私は“ゼロ”……。無能で無才、貴族であると言う事だけが私の拠り所。ここで声を上げても、誰も私の言う事なんか聞いてくれない。誰も、私の使い魔を助けてくれない……。
「……オヌシは、そのままでいいのか？」
アスナ……？

「ワシは、そのままでいいのかと聞いている」
「イヤ！　……でも、私は“ゼロ（無能）”のルイズなの。何の力も……」
「この、おおたわけが！！」
グフ！？　ま、また殴ったわね？
「何度でも殴ってやろう！　オヌシが、いつまでたってもツマラナイ事でウジウジしているうちはな！！」
つ、ツマラナイ事ですって！？
「ああ、実につまらん！　そして、くだらん事じゃ！！
……オヌシは、誰かが着けた評価を甘んじて受け入れるのか？」
違う！　私は“ゼロ（無能）”の落印を返上しようとがんばってきた。
「がんばってきた……か、なるほどのう。じゃが、オヌシは自身を“ゼロ（無能）”と呼ぶ。なぜじゃ？？」
「それは……」
「もう、オヌシは諦めておるんじゃないのか？」
っ！！？
「違う！」
私は、必死に否定する。だけど、
「オヌシは楽になりたい。じゃから自身を“ゼロ（無能）”と呼んでいる」
「違う！！」
違うと否定しても、
「……ならば、なぜ地面（諦め）を見ておる？　天（決して辿り着けぬ目標）を仰ぐのに疲れたのかのう？」
アスナの言う事をどこか肯定してしまう自分がいる気がした。私は、それを必死に振り払った。
「ならば、オヌシはどうしたいのだ？
オヌシは何をしたいのだ？
……ワシから言わせれば、恐ろしくシンプルな答えじゃ」

「……答えは簡単？」
「そうじゃ、天でもなく地でもなく、ただ真っ直ぐ前を見ればよい。オヌシが手にしている力と真っ直ぐ向き合えばよいのじゃ」
自分の力と真っ直ぐ……、
「どんな無様な力でもよい。それは、オヌシだけの力じゃ」
アスナが、私の杖に手をかけて笑いかけてくる。
アスナ、アナタは私の“魔法（失敗）”を認めてくれるの？？
「……どうじゃルイズ？　自分が今、出来る事が見えてきたであろう？」
……そうだ、私には魔法がある。失敗？　いいえ、違うわ！　誇りも何も無いバカ共くらいなら、問答無用で吹き飛ばせる私だけの魔法（力）よ！！

Ａｎａｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

ぼやいてもどうしようもない。とにかくオレは、飛んでくる攻撃を凌ぎ続けるしか……、
「アンタ達、貴族として恥を知りなさい！！」
チュドーン！！
「ぐぉぉぉ！！？」
お？　クギミヤ～な声がしたと思ったら、強力な爆発で暴徒化した生徒をなぎ払っていくルイズがいた。
まったく、頼もしいねぇ～。
「ぼ、僕もすけだ……」
「あ、じゃぁこの娘（シエスタ）を頼む」
「へ！？」
無謀にも助太刀しようとしたギーシュに、オレは気絶したシエス

タを押し付けた。ＭＰが切れたバカにはうってつけの役割だ。加勢すると抗議声を上げるバカだが、とにかくすっこんでろ！　って、〈エアハンマー〉で吹っ飛ばされて……あ、シエスタは無事みたいだ。

さて……、大半の生徒はルイズの〈爆発〉に吹き飛ばされて脱落していく。なんか、見当違いの場所も吹き飛ばしているが……おおむね良しだ。

……って、

「……まったく、バカドモは加減ってもんを知らんのか？」

暴徒化した生徒の一部が吹っ切れたのか、協力して１０メートルクラスの土くれゴーレムを呼び出していた。さらに別のヤツが金属製の棍棒や鎧で武装させていく。

……って、マズイ！！　オレは、〈爆発〉を放つルイズの元へと駆けつけ、

「しゃがめルイズ！」

「へ！？」

「「「ぶっとべー！」」」

「グゥ！？」

振り下ろされた棍棒を両手で構えた槍でいなした。だが、完全にいなしきれずに槍が奇声を上げて変形する。だが、それだけに留まらずに槍を持っていた片腕の骨が――感覚から言ってヒビがいったか？

……いくらガンダールブの力があるからって、駄作並みの槍じゃコイツの相手はキツかったな。

オレは、槍を捨ててコブシを構えると武装ゴーレムと対峙した。

さて、何処までやれるか……。

「イツキよ……」

アイボーリーな長髪と妖精の羽を生やした小さな後姿、

「手加減は要らん、ワシを使え！

この痴れ者共に“説教”をくれてやるぞ！！」

後ろからだから良くは判らんが、えらくご機嫌斜めな顔だなアスナ？
「そんな事はどうでも良い、さっさと引く抜かんかバカモノ！」
「はいはい。……確かに、いい加減この大バカどもをしかってやる必要があるなぁ！！」
目の前に、武装ゴーレムの棍棒が迫ってくる。
ユックリと――いや、恐ろしい速度で振り下ろされた棍棒を見据えながら、一振りの巨大な剣を、オレは時空鞘から引き抜いた。
そして、
「ハァァァァ！！」
裂帛の気迫と金属が切り裂かれる甲高い音と共に、真っ二つになった棍棒の片割れが宙を舞った。
それを、掲げられた2メートルを超える鋼の刀身が見届け――宙を舞った片割れが学園の外壁に突き刺さると同時に、その場を支配していた静寂をなぎ払った。
魔剣“アスナ”、アウトレイジとも言われる巨大な剣。その刀身の背には、まるで機銃の機関部の様な機械――〈チャンバーシステム〉が装備されている。
「おい、大バカども！！」
「「「な、キサマ！！？」」」
真症のバカをバカと言って何が悪い？
「よーく聞け！　てめぇらはバカ以下だ！
命を奪うって事を何も判ってねぇのに、物騒な力（オモチャ）で遊ぶ大バカどもだ！
平民ごときと言う前に、てめぇらが贅沢できる理由（ワケ）を考えた事はあんのか？　あっても“自分が貴族だから”って程度にしか考えてねぇだろ？
言っておくが、てめぇらは貴族じゃねぇ。その“支配者の椅子”に座る事ができるかも知れねぇ、ただのガキだ。
てめぇらは貴族の矜持とか言ったが、てめぇらが持ってる“矜持

（支配者の力）”ってのはな、相手を脅えさせるだけの単なる暴力だけだ。んなもん、路地裏でいきがってるゴロツキどもと大してかわらねぇんだよ！！」

「「「キサマ、言わせて置けば！！！」」」

「それすら分かってねぇ大バカどもは……カートリッジ・ロード！！」

〈チャンバーシステム〉の駆動音――発砲音と共に、アスナは次々と使用済みの魔法弾の空薬莢を次々と吐き出していく。

「〈パワーコード〉入力！　〈チャージショット〉〈ブーストアタック〉セット、〈リミットコード〉ロード！」

その無骨な薬莢を吐き出す度に、アスナの刀身が紅い輝きを放つ。

そして、

「「砕け散れい！！」」

そして、オレは正段に構えたアスナを真一文字に振り下ろし……武装ゴーレムもろとも学園を真っ二つに両断した。

ゼロマ・1-6（後書き）

あとがきと言う名のキャラ紹介

オリ主、如月　樹（イツキ）。
アルシャード・ガイアの世界に高レベルクエスターとして転生した青年。前世にてゼロの使い魔（原作）の知識をもつ。
クラスとＬｖ。
ソードマスター：Ｌｖ７
レジェンド：Ｌｖ８
アルケミスト：Ｌｖ５
武装、魔剣“アスナ”――アウトレイジ相当（上級ルールブックｐ９６）
所持品、エキストラ――剣精“アスナ”、無限リボンｅｔｃｅ……

今回の戦闘では、魔法学園の生徒（Ｌｖ５相当のモブｘ４）と武装ゴーレム（Ｌｖ１０相当）との戦闘を想定しました。
設定として、魔法学園卒業の平均的なラインでＬｖ３相当。キュルケやタバサたちの様に実戦経験のあるトライアングルはＬｖ５～１０の間。魔法衛士隊隊長（とても優秀な方）はＬｖ１５程度。カリンさんとか、一部の人はオリ主と同じＬｖ２０程度と想定しています（だいたいの強さの目安として）。

武装ゴーレムと学園が受けた攻撃のダメは、
自在刃、勝利の風、潜在覚醒、アペンドユニット〈斬〉、チャージショット、ブーストアタック、リミットコード、命中クリティカ

ルで、
〈斬〉の３３＋１２Ｄ６……。
攻撃が単体ではなく、範囲（選択）になっているのはガンダールブのルーンの力です。
……もし、この世界がバカみたいに山とか島が消し飛ぶ某砦だったら（考えちゃダメだカンガエチャダメダ！

誤字や脱字などがありましたら指摘してください。
感想も受け付けております。

ゼロマ・1-7（前書き）

このＳＳはゼロ魔とアルシャード・ガイア（オリ主）のクロスです。

ゼロマ・1-7

ガンッガンッガン！！

静寂で満たされた広場で、重い金属同士――〈ヴァリアントブレイド〉で連結剣と化し、分割されたアスナの刀身がぶつかる音だけが響いた。

「ふぅ……ちと、やりすぎたか？」

「いんや、丁度良い位じゃぞイツキよ」

アスナがご機嫌な声で返してくる。周りを見てみると、なかなかの惨状になっていた。

野次馬兼暴徒と化していた生徒達は、アスナとルイズの攻撃で吹き飛びあちらこちらに突き刺さっていたり転がっていたりする。綺麗に整備されていたであろう中庭は完全にえぐれ、生徒達を守るための学園の外壁は瓦礫の山に変わっている。

……食後の運動と言うより、戦争と言った方がしっくり来る様な暴動は、文字通りオレの一太刀で鎮まった。

代償は……学園の外壁二枚と渡り廊下二本、それと中庭（ここ）の地面だな。

「……まぁ、聞いてるやつはいないだろうが言っておく。てめぇらは、貴族って椅子にすがらねぇと何もできないただのガキだ。

その点、しっかりと肝に銘じとけ」

まぁオレも、シャードやアスナが無けりゃなんもできないただのクエスターだがな……。

そう言えばシエスタは大丈夫か……って、ギーシュの横で気絶している。その当のギーシュは、広場の端っこで先程の金髪縦ロール娘と茶色い髪の少女から手厚い（？）介護を受けていた。何があったかは聞かないで置こう。

「こぉぉの、あほんだらがぁぁ！！」

ん？　アスナの元気な声が聞こえるな……。そっちの方を見てみると、なにやら教師とも取れる人達を片っ端から蹴り飛ばしていた。
……アスナ曰く、ちゃんと仕事をしろだそうだ。
確かに、こういう事態を止めるのも学園の風紀維持の義務のある教師の役目だな。
同情はしてやらんぞ？　あとアスナ、これ以上厄介は持ち込むなよ？　とりあえず怪我を〈ソウルストック〉で回復しながら、オレはゆっくりと学園本塔を仰いだ。

＊

「さて、お主らがここに呼ばれた理由は……もちろん解っておろうな？」
オスマンの爺さんがひとつ咳をして、こちらを睨んでくる。
「うむ、暴徒化して教師でも止める事のできなかった生徒達を、見事鎮圧せしめた褒美を渡すためじゃな？」
アスナが無いむ（ゴフッ！？）……胸を張ってそういった。
オスマン氏はそれを聞くと、ズルっと言う効果音でも聞こえてくれそうな位にテーブルの上でコケた。
アスナよ、お前のその肝っ玉の大きさは見習わせてもらうぜ。
「う、うむ……。確かに生徒達を諌めてくれた事には感謝しよう。じゃが、これほどの騒動を起こしてくれた責任は、取ってもらわねばのう……」
「そ、そんなオールド・オスマン！　彼は……」
「ほう、責任はオレにあると？」
「そうじゃ」
オレは、オスマン氏の直ぐ横に立てかけられている鏡を見据えながら、

「ここで、最初から最後まで事のあらましを見ておいてよく言うな」
「ほう？　どこにそんな証拠があるのかのう？」
「……その鏡、離れた場所を映し出す事のできるマジックアイテム（魔法具）だろ？
広場で戦っている時、そいつを通して見ているのを感じたぞ？」
オレがそう指摘すると、オスマンは一瞬だけ目を鋭くする。そして、
「やはり、気づいておったか……。
じゃが、それがワシが最初から見ていたという証拠にはならんぞ？」
確かにそうだ。なら、
「なるほど。じゃぁオレの責任とやらは、いったい何所から生まれているのかな？」
「それはもちろん、無断でけ……」
そこまで行ってオスマンは押し黙る。
「どうした？　オレが責任を取らなければならない事象があったから、取らせるんだろ？
まさか、この学園の最高権力者がなんの罪状も無いのに責任を問うなどと言う事は……しないよな？」
オスマン氏は苦虫を噛み潰したような顔をすると、
「そうじゃな。わしが見たのは、お主が暴徒と化した生徒に襲われているところじゃった。
じゃが……、その前にその暴動の原因としてミスタ・グラモンとの決闘があったと言う報告が上がっておる。
これに関して……」
なるほど、そう来たか……。オレは、懐から小さい筒状のモノを取り出すと、その横についているボタンを押した。
『ぐぅ……もうかんべんならない！　決闘……！！』
『だが断る！！！』
『な……！？』

『キサマの怒りの捌け口になってやる義理も無ければ、これ以上仕事を遅らせて他の奴らに迷惑をかけられんからな』
『なら、僕の前で膝をついて謝りたま……』
『お門違いもたいがいにしろ！　謝るのはキサマの方だ！　さっさとあの二人の所に行って謝って来い！！』
『ガアァァァ！！』
カチンと、もう一度ボタンを押して再生を止めた。
「さて、これがその起因だが……オレは一方的に決闘を仕掛けられ、それに対して自己防衛を行った過ぎん」
「ま、待ってくれ！　それはいったいなんじゃ？　確かにグラモンのバカ息子の声が……あ」
オレはニヤリと笑うと、
「えぇ、これは録音機。音を記録する機械です。
アンタが言ったとおり……」
カチン、
『ギーシュ・ド・グラモン参る！
逃げられると思うな！！　行け、ワルキューレ！！』
カチン。
「ギーシュ・ド・グラモンの声だ」
オレがそう言うと、オスマンは脂汗をかきながら次はどう言い逃れを使用かと考えている。それに止めを刺したのは、ルイズとアスナだ。
「オールド・オスマン、確かこの学園にはその音色を聞いたモノを眠らせる“眠りの鐘”と言うマジックアイテムがありましたね？
なぜ、今回の様な事件で使用してくださらなかったのですか？
一歩間違えば、死人が出ていたような事件だったんですよ！！」
「そう言えば、ぶちのめした教員の一人が『オールド・オスマンが“眠りの鐘”の使用許可を出してくれればもっと早く駆けつけた』とか、ほざいておったがなるほどのう。
なぁオヌシ、何か釈明する事はあるか？」

その後、学園長室になんともいえぬ音が響き渡ったとか……。
「「オールド・オスマン、私は何も知りません」」
それを、部屋の外で何事も無いようにしていた教師が二人いたとかいなかたとか……。
閑話休題。
さて、オスマンとのO☆HA☆NA☆SHIが終わったオレ達は、彼のサインと印鑑の入った一筆を手にしていた。
「お咎めなし……とはさすがにいかなかったか」
一筆は、建材の護衛の依頼書。破損させた外壁と渡り廊下を修理するためと銘打ってある。魔法で直すのかと思ったが、あの時暴徒化した生徒に手作業で修理させるそうだ。
「まぁ、この程度の罰で済んでよかったなと声でもかけてやるか？？」
「そんな事したら、また襲われるわよ？」
「お家取り潰しにならないだけマシだと思うんだがな？？」
「……まぁ、そうね。本当だったら全員そうなってたかも……」
実際、外で待機していた教師の一人が、オスマン名義でオレとヴァリエール公爵家への正式な謝罪を行うと言う誓約書を用意させようとしたからな。そこら辺はしっかりと、オレ達だけの事件で処理してもらうようにしてもらったが……。
だけど、もしルイズの実家に報告が行っていれば、チートな強さを持つと噂の“烈風”カリンとのタイマンフラグが立ったかも知れないんだよな？
ナニソレコワイ。

＊

「ねえ……。アンタ達の事、詳しく教えてくれない？」

部屋に戻ったルイズが、いの一番に言った。オレ達の事を教えて、と。
「気づいたんだけどね、私ってアンタ達の事……名前だけしか知らないじゃない？　それで……」
どこか煮え切らない様な、まごまごとした言い方。オレとアスナは苦笑すると、
「やっと気づきおったか。もう直ぐ一日経つところじゃったぞ？」
「あ、あによ！　いいじゃない一日ぐらい！！」
髪が逆立ちそうな抗議だ。赤面したルイズも可愛いな。
「ククク。それじゃ、何から話そうか……」
オレは、ルイズに自分たちがここと違う異世界から来た事を教えた。そして、ブルースフィアの日常常識から順に、奈落とクエスターの事は……ぼかして説明しておく。
「なによそれ。こっちは真剣に聞いてるのに、ふざけないでよ……」
「ふざけてない。さっき説明した事は、全部本当の事だ」
オレは、若干肩を落としてルイズに向き直った。確かに異世界云々なんて、それを認識できなければ狂人の戯言にしか聞こないよね～。
「まぁ、異世界などと難しく考えるよりは……恐ろしく遠い場所から来たと考えればよかろう？
そう言う解釈なら、ルイズも飲み込みやすかろうて」
「恐ろしく遠い場所……。うん、まあそれなら何となくは解ったわ。それでも、ハルケギニア以外の場所なんて想像できないわ。第一、メイジが――貴族がいない国ってのも……」
やれやれ、これは納得してもらうのに苦労しそうだ。
それから、今度はオレ達はルイズに質問した。
家族構成は、厳格な父と母、それから苦手な姉と病弱な姉がいる様だ。ここは、原作と同じようで、妹とか弟とか姉とか兄とかが増えているような事はないようだ。
それからルイズは、凄く言い辛そうにすると、

「私、魔法が使えないの」
と、自分の魔法について話してくれた。……なんだか、若干目が潤んでいるぞ？
「じゃが、使えていたであろう？　昼間は暴徒どもをなぎ払っておったではないか」
「あれは……失敗なの。
私は、どんな魔法を使おうと全部“爆発”しちゃうの。ほら、今朝のシュブルーズ先生の授業だって。先生は“炭”が出来たって言ったけど、……普段なら教室が吹き飛ぶくらいの爆発が起こってた」
「ふむ……」
「攻撃手段としては十分じゃな。あやつらも、景気よく吹っ飛んだおったしのう！」
アスナが、暗い話を笑い話にしようとチャチャを入れるが、それはこの場合失敗だぞ？
「だから、私は魔法の成功率“ゼロ”のルイズって呼ばれてるの。失望しちゃったでしょ？」
「ん？　なぜだ？」
「なぜって……。使い魔は、その主人にもっとも相応しい存在が召喚されるのよ？　だから……」
「『“無能”である自分に呼び出されたのだから、同じく“無能”だと思われる』か？」
「……そうよ」
「ルイズ、お前にアドバイスをやろう」
「アドバイス？」
「『天を仰ぎその高みを羨むでもなく、地に俯いて自らに絶望するでもなく、ただひたすら真っ直ぐ前を見据えよ』」
「……なんか、アスナに言われた事と変わらないアドバイスね？」
「ありゃ？？」
「ぷ！」
ルイズが突然笑いだした。なんでも、これだけ違ってるのに似た

事を言ったのが面白かったようだ。それにしても、アスナはいつこのアドバイスを言ったんだ？
「ま、まあいいわ。
うん、だからちゃんと前を見ていこうかなって……。ダメなものだって、私から見捨てちゃいけないのよね」
……なんだか、原作より前向きだな。それとも、この世界のルイズはこうなる要素があったのか？？
「ん～。じゃぁ、オレからは別のアドバイスをやろう。
『自分よりも強い相手に勝つには、自分の方が相手より強くないといけない』ってやつだ」
「……なにそれ？
なんだか矛盾してるし、何を言いたいのか……」
「ああ、確かにこのままでは矛盾している。
本当は何が言いたいのかを見つけるのもアドバイスのうちだ」
「何よそれ、謎かけなの？」
困惑するルイズにオレは、
「“強さ”の秘密さ」
と、だけ教えてやった。ルイズが、この答えにたどりつけるかは正直解らないが、もし気づく事が出来たら……。

ゼロマ・1-7（後書き）

あとがきと言う名のナニカ。

デルフ「おう、このまま行くとホントに出番がなくなりそうなデルフリンガーさまだぜ畜生！！」
ミカ「ここでも空気になりかけているマシンヘッドのミカです」
デルフ「おうおう！　お前さんなんかまだいいじゃねぇか、出演した事がある分だけよ！　おれっちなんざ……」
ミカ「愚痴っているヒマはありませんよ??　あとがきの配分は短いんですから」
デルフ「おっといけねぇ、忘れてたぜ。
……にしても機械っ子よ。おめぇさんの相棒は無茶苦茶だな？あの魔法学園をぶった切るなんざ」
ミカ「その点につきましては、作者は色々とやってしまった感があるそうです。
なんでも、ギーシュだけの戦闘より盛り上がりそうだと組み込んだのはいいのですが、終わらせ方に不満があったらしく……最終的にあのような形になったとか」
デルフ「にしてもよ、アレだけの力、使う相手が違うんじゃねぇのか？　ほら、土くれのねえちゃんとか、グリフォン隊の隊長さんとか……もっと使うべき相手がいるじゃねぇか？」
ミカ「……」
デルフ「それによ、イツキっていったっけか、あの坊主？
自主性って言うか、自己主張って言うのが他のＳＳに比べて無さ過ぎって言うかよ……」
ミカ「……」
デルフ「ブッチャケ、ヘタレキャラなんじゃねぇのか??　あんなんに使われる身にもなって……ん?　き、機械っ子、ナニヲシテイ

ルノデスカ??」
ミカ「アナタが消し飛ぶように、デモリッションカノンの照準を合わせている最中です」
デルフ「へ、何かと思えば……。どんな“魔法”だろうと、おれっちにかかれば吸収してやる！」
ミカ「……分かりました。純粋“物理”重力波攻撃を開始します」
デルフ「や、やめろ！　考え直せ機械っ子！！　そいつは吸い込め……」
ミカ「発射！！」
デルフ「アァーーー！！！　ね、ねじれてるぅ！！??　バラバラになってるよおれっち！！！！??」
ミカ「……では、誤字や脱字などございましたらご連絡ください。
感想も随時受け付けております。
……もう一正射必要ですか?」
デルフ「ヤメロー！！　で、出番が！　おれっちを武器屋に！　武器屋につれってってく……ガク」
合掌。

ゼロマ・２-１（前書き）

このＳＳは、ゼロの使い魔とアルシャードガイア（オリ主）のクロスです。
い、一ヶ月ぶりの更新　ｏｒｚ

ゼロマ・2-1

side　アスナ

ワシらの乗った馬車が、ガタゴトと揺れる。まぁ、こういう移動もアリなのじゃなと思いたいのじゃが……、

「何であんた達が付いてくるのよ！」

「いいじゃない別に～。私はダーリンと居たいだけなのよ？」

まったく姦しいとはこういう事を言うのじゃな。じゃがしかし、

「おぬしら、騒ぐのも良いが……少しは周りの者達に気を使ったらどうなのじゃ？」

周りの迷惑を考えなければただウルサイだけなのじゃ。ほれ見ろ、一緒に乗っているメイドさん達が萎縮しておるぞ？

ポン、

「ん？」

「……アスナ、お前が注意したから萎縮しているんだぞ？」

にゃにをー！？　ワシはただ正しい事をだな……、

「まぁまぁミスタ・キサラギ。ミス・アスナが注意しなければ、ミス・ヴァリエールとミス・ツェルプストーは王都に付くまでケンカをしていましたよ？　それを考えると……」

おぉ、ロングビルとやら、ワシに賛同してくれるか！　持つべきものは同姓（？）じゃな！　しかしイツキよ、もうちょっとワシの事を気にかけてもじゃな……。

「はぁ……」

イツキのヤツめ、ため息などつきおって……。

じゃが、それを最後に馬車の中が一応静かになる。

イツキはと言うと、ワシの上に置いた手でナデナデしてくる。

そんなイツキに、ワシは上目使いにイツキを睨みつける。じゃが、

肝心のイツキは生欠伸をかみ締めてだらけておる。まったく、イツキのヤツは何を考えておるのやら……。そう思うとなにやらムカムカしてきた。
「……いい加減に～せんか！　ワシは子供ではないのじゃぞ！！」
「フベラベ！！？」
ドサ！
「キャー！？」
ゴロゴロゴロ……ガスガス、ガスガス……。
「り、理不尽だ」
言っているヒマがあったら、さっさと戻って来い。このおおたわけが！

side　アスナ　end

まったく、酷い目にあったな……。
オレは、アスナを睨みつけながらゾロゾロと王都に向かう馬車に眼を移した。
トリスティン魔法学園は、周囲を広大な草原に囲まれていてそれ以外の建造物は何一つない。つまるところ、俗世と隔離されている。
そして、生徒達は俗世と隔離された環境で勉強に励む……だけではない。やはり息抜きの一つや二つ欲しがるものだ。それも、外出と言う名の娯楽が……。
「……だが彼らには、ソレすらもなくなると言う切実な現実があるのか」
「ま、虚無の曜日までの四日で直れば、そんな事にはないらしいけどね。
……あと、来週までに直らないと舞踏会を延期にするとかも言っていたわね」

オレ達は今、オスマン氏の依頼（と言う名の懲罰）で学園を修理するための建材を買いに、王都に向かって馬車を走らせている。
メンバーは、ルイズにアスナ、馬車を操るシエスタなどメイドさん達。それから学園代表として秘書のロングビルさんに……なぜか付いて来たキュルケとタバサ＋αだ。一応＋αに＞破魔の瞳＜を向けて見ると……、予想道理に魔法の塊だった。
「……なに？」
「いや、変わったメイドさんだなと……」
「ッ！？　……実家のメイド。使い魔を召喚したから、その世話役」
「なるほど、だから他の娘みたいに萎縮していないわけか」
「そう」
まぁ、妥当な言い分だな。
……あの騒乱騒ぎで、学園のほぼ全生徒が罰として修理を言い渡された。そして、一時的にではあるが全授業が休講となった。もちろん、懲罰を受けなかった生徒にはオスマン氏が自室で自習をしている様に言った。だが、守っている者は皆無だろう。現に目の前にその体現者が二人居るし。
「しかし、移動手段が馬とはな……やはり不便だ」
「不便ってアンタ……。なら普段どんな移動手段を使ってたのよ！」
「ん、車（バギー）だな。あぁ～、かさばるからって置いて来ちまったんだよな。もってくりゃ良かった」
いや、その前にそんなものを持ち歩くなと言われそうだ。主にアスナから。それに、若葉マークも取れてねーし。
「クルマ？」
「ああ、油の爆発で回転エネルギーを生み出す動力機関を積んだ……馬車みたいなもんだ。もっとも、あっちは馬が要らないがな」
「馬要らずの馬車ですか……馬の世話をしなくて住みそうですね」
ほんと、馬の世話をしなくてすむんだ。そんなのがあるから馬車は一般に復旧しなかったんだよ。それからルイズが、コルベール先

生がそういった変なカラクリを作っていると言う事も聞けた。

ｓｉｄｅ　タバサ

今日は臨時休講。
目の前には、昨日の決闘で見た事もない連結する剣を持つ異国の剣士――イツキがいる。
隣でメイドに化けている私の使い魔の事を聞かれたときは、正直心臓に悪かった。まるで見透かされているような……そんな感じの眼だった。
「……そう言えばアナタ、名前を聞いていなかったわね？　私はキュルケ、タバサの親友よ」
「あ、私はイ……」
ボカ！
あ、危ない。彼女の名前は少し変わっている。このまま教えていたら……教えていたら？　確かに変わった名前ではあるが、言い方しだいで十分に誤魔化せるのでは……、
「い、イタイのねお姉様！」
「あら、アナタ達そう言う関係だったの？」
ボカボカ！！
「イ、イタイのねイタイのね！！」
とりあえずお仕置き。
「……彼女は、イルククゥ」
「変わった名前ね？」
「でも（変わっているから）憶え易い」
そう言って、イルククゥに余計な事を言うなと睨みつける。
「ん～、まぁそうね。変わってるから覚えやすいか」
……キュルケは納得してくれた。これで余計な心配を、

「でも、お姉様ねぇ……クスクス」
訂正、別の厄介ごとを抱え込んでしまったようだ。

side　タバサ　end

＊

「やっとついたわ」
「ほう、ここが王都か……」
「うむ、中世ヨーロッパを髣髴させる町並みじゃ。
しかし……道が狭いのう」
確かにアスナの言うとおり道が狭い。
「狭いって、ここは大通りよ？」
「これでか？　店がなくとも道幅が五メートルしかないぞ？」
ん～、中世ヨーロッパの町並みとかだとこんな感じじゃないか？
それに、
「たぶんだが……対騎馬兵の防御を行う街作りなんだ」
違うと思うけど。
「それでは、私はギルドに建材の発注をお願いしてきます。
皆さんはその間、自由に行動していいですよ」
ロングビルさんがそう言うと、メイドさん方がそれぞれ自由行動を始める。まぁ、臨時休みみたいな物だからな。一応、馬車番として数人のメイドさんが残るらしいけど、後で交代するのかな？
さて、オレたちも自由行動に移るか。あれ？
「……そう言えばタバサ、あのメイドさんは？」
「……イルククゥには、別の買い物を頼んだ。後で合流する」
なるほどね。

それじゃ、日用品とか買いますか。

・・・・・・・・・・
・・・・・・
・・・

「しかし……にぎわっているのは良い事じゃが、治安がよろしゅうないのう」
「ほんと、物騒ね～」
「……そうねと、肯いたら負けなきがするのは気のせい？」
「負けを認めてからじゃなきゃ、勝てない事もあるさ」
それから少しして、オレは現状に呆れていた。
先程からスリが多いのだ。中にはナイフで服を切って小銭を頂こうとするヤツや、魔法を使って奪おうとするヤツもいた。もっとも、服はそこらへんのやわなナイフじゃ切れないように鉄片や鉄線を仕込んだ強化服だし、魔法で奪おうとするヤツには破裂して色のつくペイントボールを代わりに渡してやる。
よく無事だったなサイト……。
他にも普段は裏通りにいそうなゴロツキや、酔っ払って手がつけられない貴族やらなんやらと……。全員、衛兵詰め所にぶち込んでやった。
ちなみに、スリなどのゴロツキを捕まえた褒美として、彼らの懐から少しだけ拝借させてもらった。これも立派な戦利品だ。
「……日用品は、一通り揃えたな」
下着類などの小物に、代えのコートの発注も済ませた。一応予備はあるが、前日の騒乱でボロボロになり後一着しかない。ちなみにボロボロになった方だが、複製ついでに仕立て屋で直してもらっている。

「そうね……あ、あと剣も必要ね」
「剣？　ワシがおるじゃろう？　別の剣など必要は……」
「アンタは物騒すぎるのよ！　何処をどうやったら魔法学園が“真っ二つ”になるのよ！？　まったく、非常識極まりないわ！！」
まぁ、それには一理あるな。それに、
「アスナは大きすぎて、普段から出して持ち歩けないからな。持ち運びの効く小振りな剣とかがあった方が……」
オレがそう言うとアスナの眼から光が消え、
「……のうイツキよ、ワシ以外の得物を使う気か？」
「……イイエ、ツカウワケナイデショ？　ナニヲイッテイルノカナ？？」
あ、危ない。物理的よりも精神的にヤバイ。
「あ～、もうこんな時間じゃない！」
ん？　あ、もうこんな時間か。
「もうお昼時だし、お昼を食べるか？」

＊

side　イルククゥ

グゥゥゥ……。
「きゅいぃぃ……お腹が減ったのね～」
「お嬢ちゃん、こっちで美味いもん食わせたやろうか？」
「ホントとなのね！？　早く食わせるのね！！」
「お、おう。こっちに来な」
「わ～い！」

＊

side　イルククゥ　end

ゼロマ・2-1（後書き）

あとがきと言う名の何か

アスナ「……のう作者よ」
カザナ「な、なんでしょうか？」
アスナ「一ヶ月も放って置いて、何かワシらに言う事は無いのかのう？」
カザナ「す、すみません！　楽しくの方を書くのが面白くて……」
ミカ「問答無用」
　ババババ！！！
カザナ「ギャァァァァァァ！！」
……
アスナ「さて、これでよかろう。
　皆久しぶりじゃのう。剣精のアスナじゃ」
ミカ「あれは萌えないゴミに出しておきましたよ……と、ここしか登場できない機械娘のミカエルことミカです」
アスナ「今回は、街へ出かける話じゃったが……」
ミカ「外伝のお話と絡むみたいですね？　フーケ戦はどうするのでしょうか？」
アスナ「アヤツは、フーケ騒動はやらないかもと向かしておったぞ？　それに……」
　ピラ
アスナ「こんなものまであったぞ？」
ミカ「……ダンピールの娘にホムンクルスの娘？
　それとこっちはヒラ……」
カザナ「ダメー！　それ以上はダ……グフ！？」
ミカ「仕留め損なっていましたか。ではもう一度、萌えないゴミに棄ててきますね」

アスナ「うむ、気をつけていってこい……ん？」
二人Ａ「「なぁ、俺たちの出番は？」」
アスナ「さぁなぁ～」
二人Ｂ「「私たちは？」」
アスナ「あ～、アヤツの更新速度しだいじゃろうて」
四人「「「「そんな～！？」」」」
ミカ「……おや？　ココにも萌えないゴミたちが……処分してきますね？」
四人「「「「いやー！！！」」」」
アスナ「……さて、それではまた次の更新じゃな。
　感想を待っておるぞ～」
カザナ「ご、誤字や脱字の報告もお願いしま……」
ミカ「まだいたんですね？」
カザナ「ギャァァァァ！！」

ゼロマ・２-２（前書き）

このＳＳは、ゼロ魔とアルシャード・ガイア（オリ主）のクロスです。

ゼロマ・2-2

一通りの買い物を済ませたオレ達は、ギルドで発注を終えたロングビルさん達と合流して昼食を取る事にした。

そう言えば、

「おかしい。お昼には、ココに来るように言っておいた」

タバサが言うとおり、イルククゥが戻ってきていない。

まぁ、出発の時刻までには戻ってくるだろう……あれ？　なんか忘れているような気がするが……なんだったっけなぁ？

「ん？　どうしたのイツキ？」

「……いや、な～んか忘れている気がしただけだ」

「？」

特に重要なことじゃないだろうと、ルイズ達と共にそれなりに高そうなレストラン（？）に入っていく。

どこかで、

『おれっちを買ってくれー！』

と、泣き叫んでいる剣がいた気がしたが気のせいだ。

閑話休題。

オレ達が入った飲食店は、そこそこ儲けている商人などが利用できるような小奇麗なレストランだ。さすがに超のつくような高級店には、学生の身分で（金銭的な理由で）おいそれと入るわけにはいかない。それに、平民のオレがいるのでそう言う場所はＮＧだ。この店は、それなりにお金を持っている人達も利用しているようで、利用客からはそれなりにいい評価を受ける内装や接客サービス、それに料理も美味いのだとか……。

しかし、洋風の食事にはまだ慣れんな。

パンが主食なのは分かる。オレも朝食にはお世話になっているし、お昼の時間のない時などにも重宝している。まぁ、正直に言うと少し食い応えに足りないのだ。

チラリと横を見てみると、
「パクパクパク……」
タバサはサラダの山をシュレッダーにかけている……。やっぱりルイズみたいにパイにすればよかったか？　そういや、肉類のパイも西洋料理にはあったよな？
オレがそう思っていると、
ガタン！
「あら、どうしたのタバサ？」
「……なんでもない」
いきなり席を立つタバサ。なんか心なしか顔色が悪い。
「のどに詰まらせたのかのう？」
アスナが水を渡すが、たぶん違うだろう。
タバサは、一応それを受け取って席に戻る、すると、
「そう言えば、最近王都に住んでいる女の子が行方不明に成るっている事件が起きているらしいな。
行方不明になっているのが平民ばかりだから、王室は何の対処もしていないようだが……」
「ぶっそうねぇ、フーケとか言う盗賊も出回っているみたいだし……トリステインも治安が悪くなったのねぇ」
隣の席での会話が聞こえてきた。たわいもない世間話なんだが、行方不明者に盗賊ねぇ……あれ？　イルククゥに行方不明者……。もうちょっとで思い出せそうなんだが、思い出せな、
ピキュイーン！　＞運命の予感＜！
あぁ、そうだよ！　誘拐イベントがあったじゃないか外伝で！
たぶん、彼女はそれに巻き込まれている可能性が高い。だからタバサの様子がさっきから変なんだ。使い魔とのパスで、イルククゥの以上を知ったのだろう。さて、どうするか……、
「さてと、食事も終わったことだし……コレからどうする？」
「……彼女が心配、探してくる」
会計を済ませた後、キュルケが聞いてきた。ルイズはどうやら剣

を買いたいようだが……アスナがいる限り無理だろう。で、タバサが最初にイルククゥを探しに行くと言った。

＊

そして今オレ達は、あまり衛生的よろしくない通りを歩いている。理由は簡単。オレがイルククゥの捜索を手伝うと言うと、キュルケがそれに賛同。なし崩し的にルイズも引っ張られての捜索活動となった。

それにしても、情報収集なんかで活躍できるスカウトがいないパーティーでシティーアドベンチャーとは……。せめて土地勘があるであろうルイズ達が頼みか。

とりあえず、タバサの頼んだ用事とやらの場所――本屋に行ってみたが、収穫なし。そもそも、蒼く長い髪のメイドさんが来店したという証言すら得られなかった。

しょっぱなから手がかりがゼロ……。

「誰か見なかったか聞く」

「そうするか」

タバサの案に従って個々に聞き込みを始めるが、

「き、貴族様お許しを！！」

「ちょ、ちょっと！　私は蒼い髪の……」

もっとも、あの様子じゃルイズ達はまともな聞き込みなど出来そうもないな。さっき使ったから＞運命の予感＜の残り回数は、二回か？　もう少し取っておきたいが……、

「背に腹は変えられないな……」

発見が遅くなるほど、彼女たちの救出が難しくなる。特に国境を越えられてからではアウトだ。それまでに足跡を見つけなければならない。

＞運命の予感＜！
「……あの、貴族の従者様、蒼い長い髪のメイドさんを探していらっしゃるのですか？」
「あぁ、迷子になったみたいでな。どこかで見ませんでしたか？」
「はい、私どもの経営している食堂で食事をなさっていきました」
「それで？」
「はい、手に持っていたお金の分だけ食事を済ませると……出て行かれました」
　はい、嘘ですね？　原作でもお金を使い切って追い出していたでしょ？　まぁ、今のところそれを追求する必要は無いか……。
「その後の事は、何か分からないか？」
「え～と……」
　……まぁ、大体の事は判った。お金を使い切った彼女は、お金と食事を恵んでもらえないかと奔走。すると、気の良さそうな人が現れて……、
「のこのこついて言っちゃったわけね」
「……後でお仕置き」
　そう言うわけで、オレ達はイルククゥが連れて来られたと思われる場所へと向かっている訳なのだが……。
「しかし、本当に汚いな……。伝染病でも発生するんじゃないか？」
　そこらかしこに放置されている汚物と、それに群がる蟲、虫、ムシ！！　ちょっと大通りを外れただけでこれか……。
「伝染病かは分からないけど……病気が多いのは確かかね」
「清掃事業の公務化を推奨するぞ？」
　一時的に国の財政面を圧迫するが、病原となる汚物が減って人口が安定する。それに、ともなっての税収の安定化が見込める。
　さらに、清掃業で収入を得た人達――下級貴族や没落貴族がモノを買うようになれば商業も活性化し始める」
「そんなの貴族のやることじゃないわ！　魔法をそんな事に使うな

んて……」
「私利私欲で、己のちっぽけなプライドを誇示するために無礼打ちするよりは、マシな使い方だと思うがな？
それに、貴族は平民を導くためにあるって始祖ブリミルは言っているんだろ？」
「そ、それがなによ？」
「導くって言う意味を考えた事はあるか？
いや、導く先か……。
ルイズが貴族として平民を導く先は……家畜小屋か？　ゴミ溜めか？　肥溜めか？」
「っ！？」
「……これも課題だな。ルイズ、自分に問いかけ続けてみろ。そうしたら、いつか答えが見つかるかもしれないぞ？」
無言になるルイズ。まぁ、考えているんだろう。
オレ達はそのまま、魔法薬を扱っていそうな店を通り過ぎてその隣の武器屋も……、
「お、オレッちを買って……！」
「デル公黙ってろ！
客がこねぇんだから騒ぐんじゃねぇ！！
これ以上騒ぐんだったら棄てちまうぞ！！！」
……まぁ、気かな事にしよう。そのまま通り過ぎていった。

＊

あれからしばらく道を進み、
「まいったな……」
手がかりが無くなった。
そこらへんを屯している連中から、イルククゥの情報を収集をし

ながらココまで来たが、
「だめね。ここら辺じゃ誰も見ていないって」
屍累々……ではないが、ボロボロになったゴロツキを投げ捨てながら、やれやれといった風にするキュルケ。原作では、邪魔だからと窓ごと恋人（笑）をたたき出すようなバイオレンスさがあったが……。
「あら、ゲスな男には容赦する必要なんて無いじゃない？」
左様で、
「もう！　どうするのよ……って、タバサ、それどうしたのよ？」
「財布」
路地裏から出て来たタバサが、小銭袋のようなモノを皆に見せる。中身は空っぽのようだが……、
「後でお仕置き」
どうやら、イルククゥが落としたものらしい。って事は、それが手がかりか……。
財布が落ちていた場所は、狭い路地の袋小路だそうだ。ここは道が狭いから、あんなに目立つ蒼い長髪のメイドを見ていないヤツがいないのはおかしい。
「おい、ホントに蒼い髪のメイドを見なかったのか？？」
「ひぃ！！　み、見ていないんです！　ホントなんですって！」
「お、オレもそこの路地に男と入っていくのを見たけど……それしか見ていないんだ！！」
まいったな……、
「やっぱ、あの娘はなんかヤバイ事に巻き込まれているかもな」
「え、なんで？」
「さっき食事をした店で、この街で若い娘の行方不明者が続出しているらしいって噂を聞いてな」
「え、そんな噂があったの？」
いや、結構大きな声で言ってたぞ？　聞こえてなかったのか、
「あったんだよ！

そんで、物乞いをするイルククゥは……」
「絶好のカモ」
うんうん、タバサは頭の回転が速くて助かる。
「じゃぁ、彼女は人攫いか何かに連れ去られたってわけ??」
「そう見るのが妥当だな」
物乞いをする若いメイドさんと、不振人物に路地裏。きな臭いにも程があるぞ？　さて、ここで足取りが判らなくなったって事は、
「おい」
「ひぃ!?」
「そう脅えるな。その男だが、あの路地に入っていくのしか見てないのか？」
「あ、あぁ。オレもずっとココにいた訳じゃないから断言できないが、出て来たのを見ていないぞ」
「じゃ、ここら辺ででっかい袋を担いだヤツを見たか？」
「でっかい袋？」
「あぁ、小麦の袋よりもでっかいやつだ」
「そんなでっかい袋、ここら辺で担ぐヤツなんて見たことないよ！　邪魔になるだけだし、いいカモだよ」
「……分かった。もう行っていいぞ」
オレがそう言うと、チンピラ達（？）は一目散に逃げてしまった。
「ちょ、どうするのよこれから！　……って、何処行くのよ!?」
オレはそのままルイズの脇を通り過ぎて、イルククゥが消えた路地に手をかける。
「さてルイズ、ココで問題だ」
「は？」
「道の塞がった通路。左右にはドアもなく、もちろん前の壁にもドアはない。
この条件で残っている道は？」
「ちょ、そんな……」
「上」。

土のメイジなら壁を壊して、直せば道になる。
だけど、それらしい跡はない。
だから上か下。
でも、下には掘り返した後がない」
「うん、タバサ正解」
そう言うと、オレは路地に入って置くに進み、他の奴らもついてくる。
「そんじゃ、この壁の向こうは何があるか分かるか？」
「そんなの知らないわ」
「オレもだ。だから……」
「ワシの出番じゃな」
時空鞘から“魔剣アスナ”を引き抜き、＞チャンバーシステム＜が使用済みになり空っぽになった魔法弾の薬莢を排出する。
そして、
「ハアァァァァァ！！」
＞ブーストアタック＜と＞チャージショット＜を乗せたアスナの斬撃が、路地を封鎖していた壁を粉砕した。
「ちょ！　アンタ、一体なに……！！？」
「いや～、老朽化って怖いな。突然崩れてくるなんて……」
オレはそう言いながらアスナを時空鞘に仕舞い、瓦礫を超えてその向こう側へと抜けていく。それに習って、
「ホ～ント物騒よね。まぁ、トリステインは貧乏だから仕方ないか」
「物騒物騒」
キュルケとタバサが瓦礫を超えてくる。後に残されたのはルイズだけ。野次馬がやってくる前にさっさとこっちに来いと、オレ達は目だけで早くしろと詮索する。
「あ～もう！　ホント、王都の整備に手を抜かないで欲しいわ！！」
そしてしばし躊躇した後、ルイズは瓦礫の山を越えた。

ゼロマ・2-2（後書き）

あとがきと言う名の何か

アスナ「みんな久しぶりじゃのう。剣精のアスナじゃ」
テファ「お、お久しぶりです。ゲストのティファニアです。
今回は、えぇ～っと……（ペラペラ）、してぃーあどべんちゃー？　って言うんですか？」
アスナ「うむ、ＴＲＰＧではそう分類される演出じゃな。
多くのファンタジー系ＴＲＰＧでは、迷宮にもぐって探検するダンジョン形式が簡単かつ主流じゃ。
じゃが、魔法が隠匿され科学主体のブルースフィアでは、街の中を探索して事件を解決するシティーアドベンチャー形式のゲーム進行が多用される」
テファ「そうなんですか～」
アスナ「うむ、もうちょっと街での演出が欲しいところなのじゃが……これぱっかしはのう」
テファ「作者さんの腕……ですか」
アスン「うむ」
……
テファ「え、えっと、一つ気になった事があるんですけど……。
このるーるぶっくに載っているさんぷるきゃらくたー達には、基本クラスと言うのがあるのですが……イツキさんにはありませんよね？　何でですか？？」
アスナ「うむ、イツキには基本クラス――ファイター、スカウト、ブラックマジシャン、ホワイトメイジのどれも取っておらん。それは、ルールブックには必ず基本クラスを習得しなければならないとは書かれてはいないからじゃ。
ついでに言うと、イツキは一人でハルケギニアを旅する必要があ

ったため、万能系の加護である＞ガイア＜が他の加護の代わりにもなるからじゃ」
テファ「そ、そうなんですか……」
アスナ「うむそうなんじゃ……っと、もう時間じゃな」
テファ「あ、もうそんな時間でしたか……。
　それでは、ご意見や感想お待ちしております～す」
アスナ「もしかしたら、誤字や脱字の報告も待っておるぞ？」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3899n/

アルシャード・ゼロマ

2010年10月19日06時10分発行